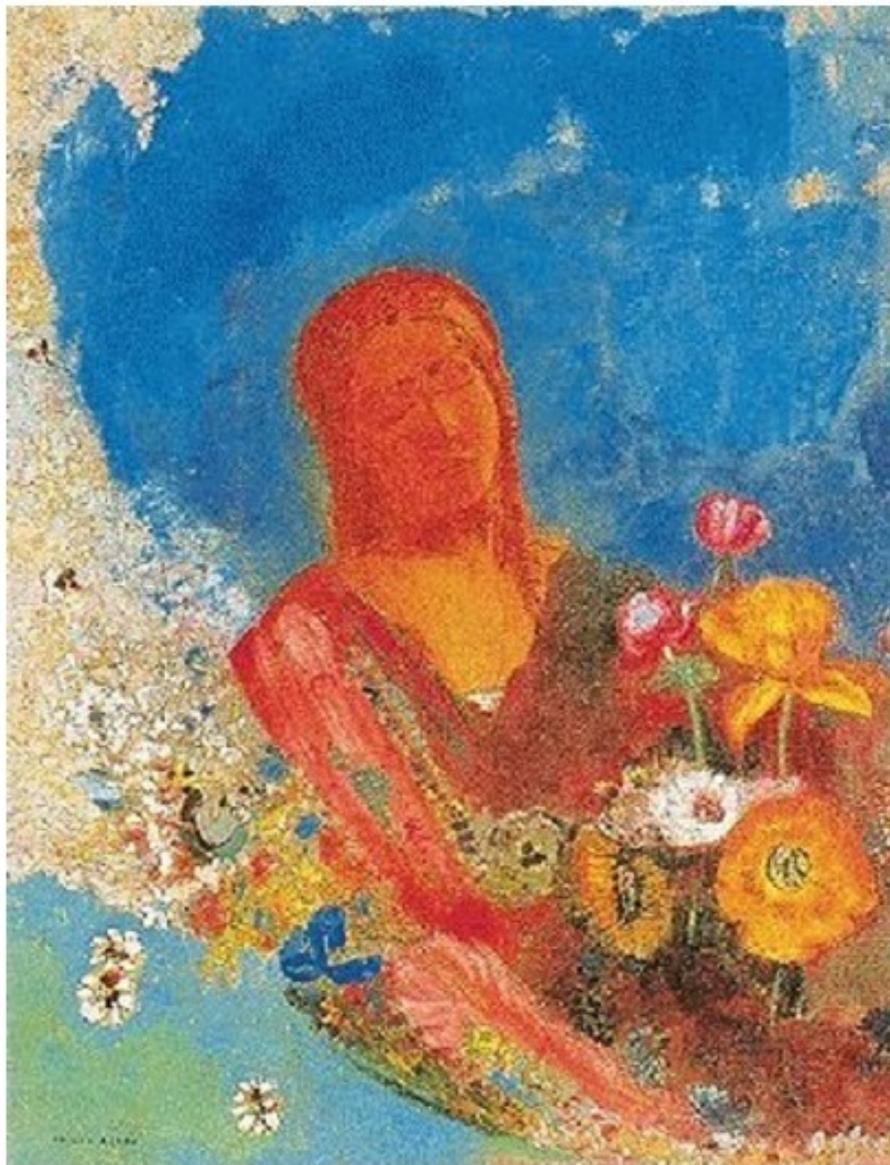


すべては落ちて、隆起する



那智タケシ著

心身脱落

心身脱落

花の美を楽しむ「私」はいない

ただ花があり、美があるだけである

宇宙と一体の「私」などない

ただ宇宙があるだけである

苦しむ「私」も存在しない

ただ苦しみがあるだけである

喜ぶ「私」も存在しない

ただ喜びがあるだけである

喜びとは、「私」がないことで

「私」がないということはすなわち

「私の苦しみ」という個別性は存在しないことである

肉体的苦痛であれ、精神的苦痛であれ、

「私の苦しみ」は存在しない

それはこの世界に蓄積され、浄化されることのなかった苦しみであり、悲しみなのだ

一切の悲しみ、痛み、苦しみを自分のものではなく

誰か他人のもの

見知らぬ子供のもの

これから生まれてくるであろうすべての人々のものとして真に感じ取れた時

慈悲が生まれる

なぜなら今のあなたの苦しみは、

あなたがこの世界を浄化するために担わされた苦しみであり、悲しみだからだ

個人的な苦しみは存在しない

個人的な悲しみ、痛みは存在しない

それは誰かの悲しみであり、万人の苦の総体である

この真実を本当に理解した時、あなたは、未来の子供たちのために、

喜んで苦しみを受け入れ、喜んで悲しみを味わいつくすことができるだろう

この時、「苦」は「苦」でなくなり、喜びとなる

心身脱落、心身脱落

一切の苦が排除されず、

あなたが担うべき責務として、あなたの中に受容されることで

苦しみは浄化され、足元に抜け落ちて消えてゆく

肉体的苦痛も、精神的苦悩もまた、

すべて自分の内部に留まらず、足元に消えてゆく

何一つ、経験はあなたの中に留まるところはない

すべては下へ、下へと流れ落ちる

時には雨だれのように

時には滝のように

葛藤を留める底蓋は外れてしまった

そして一切が抜け落ちてゆくと、そこに「空」があり、慈悲のエネルギーだけがある

心身脱落、心身脱落

あなたは常に、誰かの苦しみ、悲しみ、苦痛を浄化している

そして、世界は透明に澄み渡り、

喜びはあなたのものになる

はじめに

本書は、2011年初夏に発足した無我表現研究会の機関紙・月刊メールマガジン「MUGA」に掲載された私の原稿から、いくつかの作品をセレクトして編集、改稿したものである。詩、小説、スピリチュアル、エッセイ、評論等、無料メルマガということもあって好き勝手に書かせてもらってきたが、単なる文芸同人誌と違い、一つの傾向があるのが特徴である。すなわち、「無我表現」がそれである。

我々の言うところの無我表現とは、何も愛に満ちた感動的表現であるとか、無私の奉仕とか、宗教的精神とか、そういったことではなく、単に「エゴ」を中核としない表現であり、すなわち諸法無私の神秘的で調和的な働きそのもののことを言う。もちろん、そこには書き手の個性や趣味趣向が現れる。我々の目指すところは一つのイデオロギーではなく、主義主張でもなく、早い話が真の自己解放の末に生まれるであろう自分らしい具体的表現であり、ここにおいては逆説的に、個性こそが唯一の物差しになり得る。その点、ありとあらゆる宗教、イデオロギー、固定観念から自由であり、唯一の共通項としては、新しい人間像、世界観を具体的なものの中に提示することを目的としている表現活動ということくらいだろうか。

そういうわけで、この作品の編集にあたり、クオリティはともかくとして、とりあえず自分らしさが出ていると思われる作品を選んで構成することにした。その自分らしさとはおそらく、本書のタイトルである「すべては落ちて、隆起する」という体感であり、すなわち仏教の世界でおそらく心身脱落と呼ばれるところの一切が自分のうちに留まらない、等価な断片と感ずる諸法無我的世界の展開である。

このような様々なジャンルの作品を雑多に掲載することは、単行本としては素人臭さが残るし、一定の欲求を持って頁をめくる読者にも不親切なことかもしれない。しかし、我々の方法論が様々なジャンルの表現を並列に列挙しつつ、自我を超克した新たな生き方を自らの手でつかみ取り、創造していくというものであることを踏まえれば、親切な読者の方々は全体を通して何かしら一つの流れのようなものを感じ取ってくれるものと思っている。

本書の様々な作品の向こう側には、個人の表現の先にある何かが宿っていることを私は信じている。そしてその宿ったものは、あなたの中に宿ったものと出逢うことを願っている。

2015年10月下旬 那智タケシ

INDEX

心身脱落

はじめに

第1章 詩

例外者たち

優しい闇夜よ

真白き顔の女

紫色の蝶

きみたちはあまりにも素晴らしい存在なのだから

瞑想者

第2章 小説

鏡

超人K

秋

地下にいる宇宙人の話

芹姫

第3章 スピリチュアル

自己浄化の方法と心身脱落について

ダンテス・ダイジによる超越的境地の肉体的表現について

恩寵体験者への手紙

第4章 エッセイ

麻雀で85%負けない方法

異端が普遍になる時 ——例外者たちの声に耳を澄ませて——

第5章 評論

「遠野物語」と「新約聖書」に見る裸の神の表現

ロダンの創造に見る新たな時代の芸術

超人を抱きしめる神、神を救う悪魔 まど☆マジ論

宗教的精神におけるアヴァンギャルドのあり方とは

例外者たち

例外者たち

もしも極めて特殊な個人というものがあって

もう一人の極めて特殊な個人と出会い

極めて特殊な関係を作り

極めて特殊な世界を持ち

その特殊性ゆえに世界から忘れ去られ

誰の目にも止まることがないままに

誰一人知られることもなく

ブロック塀の裏側で

汚らしい四畳半の腐った畳の上で

その特殊性を突き詰めてゆくとする

するとその関係が

いつしかこの世界それ自体を覆してしまうような

強烈な

確かな

絶対的な真実の関係となっている

そんなことはあるかもしれないし、ないかもしれない

しかし重要なのは関係することであって

それは絶対的に特殊な、一回きりのものなのだ

そしてその絶対的に特殊であるということが

万人に当てはまる真理だとしたら

そこにもはや特殊という文字は存在せず

偉大な神々たちだけがいることになる

そんなことはありえるかもしれないし、ないかもしれない

だが、今のところそれは

例外者たちにしかありえないことで

例外者は例外者であるがゆえに

普遍になりえないのである

今のところは

優しい闇夜よ

優しい闇夜よ

冷たい街灯も、いやらしいネオンもない

誰も知らぬ、誰も通らぬ

真夜中の裏路地を盲者のように歩いていると

危うく、何ものかに躓きそうになった

見れば、闇の吹き溜まりの中に

一人の青年が丸くなって座っていた

蔦に絡まれた貧乏アパートの

汚らしい階段の前だった

どうやら、眠っているのではないらしい

フードを深く被っているものの

その目はしかと見開かれ

闇の向こうの虚空を見つめていた

彼は、どんな光景を見ているのだろうか？

優しい闇夜よ

願わくば青年の中の暗黒が

あなたのそれと溶け合って

天蓋の星まで届かんことを

真白き顔の女

真白き顔の女

無明の中に沈み込む

真白き顔の女がいた

海底をたゆたう海月のように

一切の受難に逆らうことなく

忍従の表情も浮かべず

希望への光耀に目を向けることもなく

ろくろく苦しむことさえ忘れて

運命の綾に流されて倦むこともなかった

彼女は荒々しい欲望や

感情の抑揚に興味を持つことがなかったばかりか

軽蔑さえしていたけれども

かといってそれに逆らう力を持たなかった

だからできるだけ汚されぬよう

痛めつけられぬよう

考えぬように

真白き顔をして流されて

いつか幼児の頃のような光の世界に辿り着くことを

ほんの少しだけ夢想しながら

無明の中に沈み込んで

この世の底辺で沈黙していた

彼女たちはこの世の受難者であるが

彼女たちが受難者であることを知る者は誰もいない

紫色の蝶

紫色の蝶

名も知らぬ寂れた街中を車で走っていると

紫色の巨大な蝶を見た

いや、それはよく見ると、自転車に乗った女であった

紫色のドレスみたいな、ひらひらの服を着た中年女が、

髪をなびかせ、

ドレスを舞わせ、

快活に笑いながら、

立ち漕ぎで、

風に逆らうように車道を全力疾走しているのであった

ああ、しかし彼女の狂気の何と純粋なことだろう？

廻りの人間が影になってしまうように

彼女は全力で生き、

全力で走り、

全力で誰かを愛していた

絶対にそうに違いなかった

だからあんなにも光り輝いて

モノクロームの世界から一人、飛び出して

偉大な

絶対独自の物語を

曼荼羅を展開していたのだ

際限なき生命の尊さよ

目的なき喜びの純粹さよ

誰もが、彼女の運命を羨むことだろう

誰もが、彼女を愛することだろう

彼女の迷いなき生を

澱みなき光の発露を

憧憬を持ってただただ見守ることだろう

あんな風に生きることができたらどんなに素晴らしいだろう、と

しかし、彼女がどこに向かって走っているのかは

もしかすると彼女自身もわからないのかもしれない

目的なき全力疾走

だから彼女は少々狂っていて

少しばかり太っていたとしても

あんなにも美しかったのだ

そんなことを夢想しながら前を向くと

バックミラーに、女の姿は映っていなかった

きみたちはあまりにも素晴らしい存在なのだから

きみたちはあまりにも素晴らしい存在なのだから

とある夕暮れ

みすぼらしい校庭のブランコに

三、四人の少年、少女が寄り集い

何やら秘密めいた

楽しげな時を過ごしていた

一人の少年が空を見上げ

かわいい声で言った

もう帰った方がいいのかな？

彼らの頭上には暗雲が

生き物のように蠢く巨大な影が

地上の支配をもくろむかのように漂っていた

もう帰った方がいいよ、と思う

きみたちはあまりにも素晴らしい存在なのだから

一人の少女が言った

もう帰った方がいいよ

少年は得意げに答えた

雨が降っても大丈夫だよ

少年の家が近いからだろうか？

それとも傘を持っているからだろうか？

でも、もう帰った方がいいよ

きみたちはあまりにも素晴らしい存在なのだから

ほら、雨が降り出した

上空から風が降りてきた

そしていつの間にか

どこかから現れたカラスの群れが

大群が

気流に乗って縦横無尽に旋回し始めた

もう帰った方がいいよ

きみたちはあまりにも素晴らしい存在なのだから

瞑想者

瞑想者

とある秋の夜、街が眠りについた時刻、住宅街の片隅にある小さな公園で、一人の男がベンチにだらしなく横たわっていた。

彼の頭上には、榆の枝葉が巨大な扇のように拡がり、星月の光を遮って、さわさわと風に飜いで、孤独な瞑想者を庇護していた。

男は、目を閉じていた。しかし、眠っていたのではなく、枝葉の振動に耳を澄ませていたのであった。

それは、枝葉の振動であると同時に、宇宙の彼方からやって来て、万物に生命を吹き込む、あの精妙な振動であった。

それは、別々のものではなかった。

すべては、振動によって成り立っていた。

男は、目を見開いた。するとその瞳には、見えるはずのない星の光が宿っていた。

彼は、しばらく頭上の黒い扇の複雑怪奇なぜん動を目で追っていた。

それから、少し半眼になり、再び、目を閉じようとした。

しかし、それは眠気からではなく、視界を曖昧にすることで、目の前の神秘的な運動に自らの肉体を浸潤させ、一体化しようとする人々のような人々であった。

実際、彼は神秘のぜん動と一つになって、肉体も精神も消えうせるかのように、生命のゆりかごの中で酩酊していた。

その時、彼は夜の神秘に震撼する木の葉であり、頬をなでて縦横無尽に空気の通路を吹き抜ける風であり、何十万光年の彼方で爆発する星であり、オリオン座の幾何学的な配置であり、どこまでも拡がる宇宙であった。

その時、彼はどこにも存在しなかった。

彼は、宇宙そのものであった。

そして、どこからともなくエクスタシーがやって来た。

それは、偉大なる存在それ自体への何者かからの祝福であった。

彼は宇宙の始まりからそうしていたし、これからもそうしているだろうことを知っていた。

そこには、時間が流れていなかった。

それは、ただそこに「存在している」という感覚だけがあった。

世界が、そのままにそこに存在していて、それ以上でも以下でもなかった。

それ以上でも以下でもなく、自分という存在も大きすぎもせず、小さすぎもせず、ただありのままに、過不足なく、ぴったりと樹木の下にはまっていた。まるでジグソーパズルのピースのように。

その隙間なくぴったりとはまっているという感覚が、彼に至福と永遠をもたらしたのであった。

そこには、葛藤も、混沌も、衝突もなかった。

ただ、静謐の感覚があり、足元には、自分を支える巨大なものが存在していた。

その巨大なものは、決して姿を現さないが、我々のすべてを支え、見守り、許しているのであった。

天と地に包み込まれるように抱かれて、彼は、いつまでもそのままにいたかった。

一切のわずらわしい現実から身を背け、夜という巨大な生き物の懷の中で、恍惚と目を閉じていたかった。

彼は、完璧にいたかった。

もしもこのまま、太陽が昇らず、誰もその公園にやって来ることがなかったならば、彼はいつ

までもそのままそこに横たわっていただろう。

何時間でも、何日でも、許される限り……

しかし、彼は目を見開いた。

それは、実に冷めた目つきであった。

しばらく放心した様子でじっとしていたが、ゆっくりと身を起こし、ベンチに腰掛けたまま、ざらついた地面を無表情で見つめた。

その視線が、僅かに上を向いた。それは、奇妙なことに、斜め上だった。

彼は、天と地の間辺りを見つめていたが、そこには何も存在していなかった。

彼は、暫し虚空を見つめていた。

すると、目の焦点が現実世界に合わさって、顔の輪郭がはっきりした。

彼は、もう酩酊していなかった。

何かを覚悟したような顔つきをして、立ち上がると、辺りを見回した。

彼は、一つ深呼吸をした。

夜の甘く、冷たい大気を体の中に染み渡らせ、ゆっくりと吐き出すと、僅かに微笑んだ。

それは意外なことに、どこかシニカルな、何かを諦めた人特有の、自嘲するような微笑だった。
。

それから一つ、首を振ると、意を決した様子でようやく公園の出口に向かって歩き出した。

空には、星々が満ちていて、月は、瞑想者の孤独な姿を見守っていた。

しかし、彼はもう前だけを見ていて、振り返ったりしなかった。

夜は、彼を解き放ち、微笑んだ。

誰もいなくなった公園に、枯れ葉が一枚、天上からゆっくりと落ちてきた。

枯れ葉は、地面と一つになり、地球の声に耳を澄ませた。

鏡

とある初夏の夜、仕事帰りに、ミヨは、都内のブックオフをうろうろしていた。手にしていたSF小説を、元の場所である本棚の上の方に戻そうとした時のことである。すぐ隣にいた男から、こんな言葉が発せられた。

「気持ち悪いな」

ミヨは、びくりとした。明らかに、自分に向けて投げかけられた言葉であったからだ。ミヨは、すぐに背後に振り返り、その男の顔を見た。三十半ばで、にやついた笑みを浮かべた、実に気味の悪い顔立ちの男だった。相手は、不愉快そうに目を反らすと、舌打ちをして立ち去ったが、ミヨはいつまでもその後ろ姿を見つめていた。蒼白な顔をして、何かを射抜くような目つきで、その場に立ち尽くしていた。実際、彼女のその姿を見たら、何か尋常でない雰囲気か漂っていたかもしれない。

私は、気持ち悪いのだろうか？

その言葉は、書店を出てからも彼女の胸を苦しめ続けた。それどころか、自分のアパートに帰ってからも、ベッドの中でも、夢の中でさえ彼女を苦しめ続けた。

「私は、気持ちの悪い存在なのだ。私は、気持ち悪い。私は気持ち悪い。私は気持ち悪い……」

彼女は、自分の中でその言葉を反芻し、ますますその言葉に絡め取られていった。そして、自分は他人から見れば絶対的に気持ち悪い、不気味な存在なのだという認識を強めた。

実際、鏡を見ると、そこには、三十後半の、やつれた、目だけが異様に大きい、不気味な女の顔があった。その顔には表情がなく、何を考えているのかわからなかったし、実際、彼女には自分が何ものなのかよくわからなかった。

会社では、ワンマンな社長から「そんな目で俺を見るな！」と怒鳴られたことがあったが、自分がどんな目で相手を見ているのか、彼女にはわからなかった。別段、相手を憎んでいたとか、反抗心を抱いていたとかいうわけではなく、彼女はただ「見ていた」のであった。しかし、それが相手からすると不快であったり、気持ち悪かったり、不気味だったりするらしいのだ。だから、彼女は相手の顔をまじまじと見る癖を改めて、伏し目がちになった。そして、ますます自信な

げに、他者の目につかないように自己表現をすることなく生きてきたのであった。

しかし、存在自体が気持ち悪いと言われては、もうどうすることもできないではないか、とミヨは考えた。

翌日の夕方、ミヨは前の会社で知り合った、「変人好き」を公言している風変わりな恋人に会った。迷った末に、喫茶店で昨晚の出来事を話すと、相手は言った。

「君は美しいよ」

これは、この男の決まり文句で、「君は、変だから美しい」と言っているにすぎないことを彼女は知っていた。それでも、彼女はその言葉に慰めを求め、少しばかり安堵したのであった。

二人は、喫茶店を出た。ミヨは、五月の曇天の空を見上げた。その時、隣を歩いていた恋人が、しみじみとした口調で言った。

「ああ、それにしても、君は本当に美しいね」

「どんな風に美しいの？」

「理屈じゃないんだ。君は、存在それ自体が美しいよ」

ミヨは、こんな風に繰り返されるばかりの世辞が、思いの他、自分を救ってくれていることに気づき、驚いた。どうやら、相手は落ち込んだ自分を救うために、「美しい」という言葉を連呼してくれているらしい。

でも、私が美しいんじゃない、とミヨは考えた。だって、私は美しくないんだもの。それを私は知っている。もしも私のようなちっぽけで無意味な存在を美しいと感じてくれる人がいたとするならば、それはきっと、この世界が美しいのだ。この美しい世界それ自体が、私のこともその美しさの中に加えてくれているのだ。だから、私にはどうすることもできないけれど、認めてくれる人を待つ他ないのだ。だって、私は変わることはできないし、変わるべき何かがあるわけでもないから。

そんな風に考えて、ミヨは暗雲の下を一人、歩き出した。

恋人は、もうどこにも存在しなかった。まるで、彼女が自分自身を救うために生み出した妄想か何かのように。

彼女は、一人だった。

しかし、とある存在が——息吹が——自分のことを見守り、愛してくれているようにも感じた

。

超人K

超人K

私がK君と遊んでいたのは、もう7、8年前のことになるだろうか。我々は無職の雀ゴロ（麻雀だけで暮らす人でなし）で、昼間っからいつもフリー雀荘に入り浸り、二人で打ち合っていたものだ。もちろん、お互いにつぶし合いは避けて、獲れるところからとっていたわけだが。

当時のK君と私の境遇は、瓜二つと言ってよいほどのものだった。いや、外見から経歴、性格、容姿と何から何まで対照的なほどに違っていたのだが、世界観や、麻雀に対する心構えに対しては、他人とは思えないほど酷似していたのである。同じフリー雀荘で、自分と似たような人間と出会うとは思っていなかったのも、私は彼に奇妙なシンパシーを感じていたし、向こうも同じだったと思う。もちろん、人として気が合うか合わないかといえば、それはまた別の問題で、お互いに敬意を持って接していたものの、学校で同じクラスにいたら友達にならないタイプだったろう。それでも、ある本質的な一点において、私と彼は同志であり、ライバルでもあったのだ。

K君は180センチを超える長身で、ブルーカラー特有のいかつい体をしており、実際、麻雀で生活するだけではなく、日雇いで建築現場のアルバイトもしていた。水商売風の女性と付き合っていたので（時々、雀荘に顔を出した）、ひものようなものだったのかもしれないが、そのあたりはよくわからない。

年齢は私と同じく30を出たばかりだったが、えらの張った面長の顔に小さい意志の強そうな目、口髭を生やした彼の容姿は、初対面の人間にとっては威圧感さえ覚えるものだっただろう。声は大きく、しゃべり方ははっきりしていて、動作も力に満ちみちた男らしいものだった。一方、私はといえば170センチで痩せぎすの文学青年崩れで、軟弱にへらへら笑っているようなタイプだったから、同じ雀ゴロとはいえ好対照のタイプだったと言えるだろう。

雀風は見た目どおり、K君が`剛、なら私は`柔、であった。彼はとにかく力強い麻雀を打ったが、私はスピードと動きの麻雀だった。結果的にどちらが強いかといえば、それは私の方だった。K君も私の麻雀は買っていて、「真似できない」といつも言っていたが、私も彼の汚さのない、正直な麻雀が好きであった。

何から何まで対照的な二人が意気投合したのは、お互いに「瞑想」に取り組んでいることが判明したからであった。K君は、何でも、中国からやってきたという気功の先生と知り合いらしく、気のパワーを手に入れるために瞑想をしたり、独特な呼吸法を実践したり、立禅に取り組んだり、様々な修行をしていた。これは彼とたまたま飲みに行って、気を許した時に聞いた話で、

普段はこういう話はしない。

フリー雀荘というのは特殊な場所である。社長から学生、サラリーマン、チンピラ、金貸し、無職者から前科者、ありとあらゆる人種が同じ卓につき、初対面でも金を賭けあう。多少、親しくなってもお互いの仕事や身の上を話し合ったり、質問したりすることはまずない。わけありの人間もいるし、偽名を使っている者もいる。たとえ仕事がうまくいっていようと、美人の彼女ができようと、それを自慢することは「粋」ではないとされるのだ。

雀荘で評価されるのは麻雀の打ち方と結果のみであり、それ以上のものではない。さらにいうならば、その場を楽しむキャラクターが評価されるだけで、雀荘の外にある価値は何一つ査定に値しない。しかし、だからこそ世間のありとあらゆる肩書きや、財力、地位、名誉が剥ぎ取られ、対等な人間同士の力勝負の場となる。そこにある種の人には自由と魅力を感じてやってくるのであるが、現代のネット社会では、生きた人間同士の勝負の場は、野暮とされる風潮があるらしく、何だか味気ないものだとつくづく思う。もちろん、ここでそんなありきたりの社会批判がしたいわけではない。

二人が初めて意気投合したのは、とある晩秋の夜のことである。K君と私は、雀荘の裏にある飲み屋でこんな会話を交わしていた。

「やっぱり、メンタルがすべてだよな」と私は言った。「メンタルがだめな時は勝てないもん。技術じゃないよね、麻雀」

「N君、いつも勝ってるじゃん」とK君は笑って言った。

「それはね、メンタルの状態が良い時を選んで来ているからなんだよ。だめな時は来ないようにしてる」

「だめな時、何してるの？」

「散歩に行ったり、本を読んだり、瞑想したりしてる」

「瞑想？」

「そう、まじ座禅組んでる」私は笑った。「いっちゃってるでしょ？ でも、そんなくらいやらないと勝ち続けるのは難しいよ」

「おかしくはないよ」とK君は真面目な顔つきになって言った。ここから、K君が前述したよう

な自分の修行遍歴を語りだしたのである。数年に亘るインドの一人旅や、様々なグルや新興宗教との関係等々...

「おれはね、超人になりたいんだ」とK君は告白するように言った。

「超人？」

「そう、一つの原理を身に着けることで、すべてを乗り越えることができるような存在になりたい。先生はそれに近いかもしれないけどね、おれはそれ以上を目指してる」

「一つの原理って？」

「この世界のすべてに通ずる生きた原理だよ。その原理を理解して、この肉体に宿すことができれば、人はみな超人になる。超人になることで、人は、すべての苦しみがなくなるんだ。自分のものだけではなく、他人の苦しみをなくすることができるだろう」

「ああ、その感覚はすごいわかるよ」と私がさらりと言うと、K君は驚いたようにこちらを見た。

実は、私もまったく似たようなことを考えていたのである。いや、考えていたというよりも、そうならなければ自分は生きていくことはできないと考えていたのだ。

当時の私にとって麻雀と人間関係と芸術の完成は、同じ価値を持つものであった。どれも絶対的な答えがない、不可解な世界だからこそ、その不可解さを乗り越えるたった一つの真実、超越的原理のようなものがあるはずだと思っていた。自分が生きていくためには、その三つの不可解さをつなぎ、乗り越えるたった一つの原理が必要だった。その絶対的原理を感得するために、あのような放蕩生活に身を落とさなくてはならなかったのである。なぜなら、その原理なくして、ある種の間人は決して満たされることがないからである。そして私はある種の不幸な人間であり、真実を求めてさ迷うサニャーシであった。人並みの生活を楽しむためには、何か絶対的なピースが欠けていた。

K君との違いは何かといえば、私は決して他者の内に真実を求めたことがなく、目立たぬように、常に独りで作業を続けていたことである。だから、誰も私をそのような求道者タイプの間人とは見ていなかったし、私自身もそのような人間に見られることを極力避けていた。軽薄な遊び人と見られる方が気楽だったし、性に合っていた。しかし、K君のような人物との会話はスリリングで楽しくもあった。私自身、孤独であることに倦いていたのかもしれない。むろんのこと、彼と知り合ったからと言って、私の中で何かが進むわけでもなかった。やはり、私は一人でい

たかった。

一度、K君の師匠にあたる気功の先生の下に連れて行かれたことがある。その先生は呼吸法を重視していたが、ぜんそく持ちの私にとって、呼吸をベースにした修行法は最初から論外だった。これはルサンチマンだったかもしれないが、私のようなハンディのある人間がその中に入れられない方法というのは、不完全だと感じていた。呼吸法ができない私は、ここでは劣等生にすぎないだろう。何かが間違っているように感じていた。

私には「見る」ことしかできなかつた。他には何の武器もなかつた。自分の暗闇を鷲掴みにして、直接的に見る。ただそれだけだった。そしてまなざしを上げれば光がある。ただそれだけだった。

私たちの蜜月は半年ばかりで終わった。きっかけは、M田という闇金業者の社長であった。当時、M田はフリー雀荘の常連で、我々にも小金を貸したり、馬券の飲み屋をしたりしていた。私自身、手持ちの金がない時にM田から1万円だけ借りたことがあるが、特別に一ヶ月間無利子にしてもらったのを覚えている。銀縁眼鏡に目立たぬ顔、ひよろりとした体躯の彼は、一見、真面目なサラリーマンに見えたが、やっていることは相当に悪徳だと評判であった。闇金のM田ということで、あだ名は「M金（Mキン）」と呼ばれていた。ちなみに、M金の前歯はすべて差し歯ということであったが、これは殴られても金を渡さなかつたからだと本人が自慢げに語っていた。もちろん、本当かどうかはわからない。

私は別段、この男と仲が悪くなつた。M金と、彼の中国人の愛人と三人で中山競馬場に行き、馬券を買うのを楽しんだことさえある。実を言えば、M金に競馬を教えたのは私であった。彼がすぐに飲み屋を始めるとは思いもしなかつたのだ。

飲み屋というのは、他人から頼まれた馬券を飲んでしまう（買わない）ことで、儲けるというふざけた商売である。頼む方は一割バック（1万円頼むと1000円返って来る）になるし、わざわざ買いに行かずにすむので、違法行為と知りながら、ついつい彼に頼んでしまう。私はM金と共に競馬場に行く度に、「この馬券来ると思う？」と聞かれ、「来ないと思うけど、万が一があるからやばいでしょ」などとアドバイスしたりしていた。しかし、彼の元で働くつもりはなかつたし、こんなやつと本当につるんだら終わりだと思っていた。

ところがある日、K君がM金のもとで働き出したとの噂を聞いた。実際、馬券を頼むためにいつもの携帯にかけるとK君が出た。経済的な理由もあるだろうから、私は追及もしなかつたが、K君はどこかばつが悪そうにしていた。「いずれ、独立するつもりだから」などと夢を語ったりしていたが、そんな甘いものじゃないだろ、と思っていた。

ほどなく、M金が私に声をかけてきた。雀荘の近くの喫茶店に行き、自分のもとで働かないかと誘ってくる。電話一本でこれだけ儲かるよ、と言い、背広の内ポケットから、100万円の束をちらりと見せたりした。

「でも、取立てとか自分ではできないですから」と私は断った。

「いろんな仕事があるんだよ」とM金は言った。「Kにやらしているようなのとは違ってね、仕事にはブレインが必要だから。君には月40万出すよ」

正直、心が揺れた。当時、競馬で負けが込んでいた私は、金欠に陥っていたのである。金がなくなると、人はどんなことでもするものだ。K君もきっとそうだったのだろう。しかし、M金のもとで働いていた人間がどんな末路を辿っていたか噂に聞いていたし（何か問題がある度に下っ端が切られ、刑務所に入っていた）、その頃、私は就職活動も始めていたので、答えは保留した。その晩、先日面接を受けた編集プロダクションから採用の連絡があったので、私はM金に断りの連絡を入れた。安月給でも、堅気の道に戻れということなのだろう。これは運命だと思った。

それからしばらくしたある日、私は馬券を頼むためにK君に電話をかけた。しかし、何度かけても電話はつながらない。締め切り時刻寸前になっても電話に出ない彼に私は怒りさえ覚えたが、しばらくして、K君が警察に捕まったという話を耳にした。債務整理の土地の利権がらみで恫喝を繰り返していたM金が、現場で働かせていたK君にすべての責任を被せたのだ。ほどなく、M金は雀荘に出入りしなくなり、K君は刑務所に入ったという話を聞いた。

K君が捕まる少し前のことである。私のアパートの近所に住んでいた彼が、彼女と歩いている姿を見たことがある。二人はしっかりと手を握り合い、お互いを絶対的に信頼した者同士の確かな足取りで歩いていた。単なる水商売の女とひもという関係ではなく、もっと確かな、魂で結ばれた者同士の関係がそこにはあった。K君が刑務所に入ったという話を聞いた時、あの彼女はどのようにしているんだろうな、と私はすぐに思った。

当時、私は、手を握り合う女性は誰もいなかった。たまに女性と遊ぶことはあったが、共に歩く人は誰もいなかった。友人も、師匠も、仲間も、理解者も、自分の周囲には誰一人としていなかった。独りで、緑多き小道を歩くのが好きだった。緑のフィルターを通して濃縮され、とめどなく溢れ出てくるダイヤモンドのような光に目を細めながら、K君と私と、どちらが先に真実に辿り着くのかな、などと夢想していた。もしかすると、インドに行ったり、様々なグルの下で特殊な修行をしている彼よりも、自分の方が真実に近いのかもしれない、などと思っていた。

降り注ぐ光の中に真実があり、本物の輝きがあった。そして光は、それ以上でも、それ以下でもなく、ただ光であり、真実そのものであった。人間の観念や言葉など入り込む余地がないほど

に純粹で、だからこそ我々の中に物言わずに浸透し、時に、絶望せし人を優しく包み込んでくれる、愛の顯現そのものであった。

秋

この季節になると思い出す人物がいる。秋のメランコリーに浸るわけではないが、街路樹が風に揺れ、金色の木の葉のシャワーを降らしているのを見ると、「あんな人がいたなあ、今、どうしているのかなあ」などと思うのだ。もちろん、たいがいの時は忘れてるし、自分の人生の中でそれほど大きなウェイトを持った存在ではないのだが、どういうわけか、決して心の片隅から出ていかない人物というのがあるのである。

十二、三年ほど前のことである。定職にも就かず、博打に明け暮れる日々を送っていた私は、出会い系サイトにはまっていた。無頼を気取ってはいたものの、元来、内気な性質でナンパはおろか、キャバクラなどの夜遊びもしたことがなかった私にとって、この「出会い系」なるものの登場は、人生を変えるほどの出来事であった。私は水を得た魚になった。どういうわけか、次から次へと興味深い女性と出会い、女性というものはどんな存在か、といったことや、メロドラマから精神病的関係まで、生きた人間関係の機微というものを二十代半ばにしてようやく学ぶことができたからである。当時はサクラが少ないこともあったが、それにしても苦することなく、様々な女に出会う自分に対し、若い雀友が聞いてきたことがある。

「どうしてそんなに出会えるんですか？　自分はなかなかヒットしないんですが」

「きみは気取っているから会えないんだよ。自分を自分以上のものと見せている。どんなにうまくやっても、相手は、なぜかそういうのはわかってしまうんだよ」

そんな風な知ったようなことを答えていたが、本当は、私にも理由はわからなかった。ただ、人間は、見た目やお金よりも真実を求めていることを本能的に知っていたように思う。出会いというのは結局、そういうことなのだ。みんな生きた人間の真実と触れ合うために、もう一人の他者を求めているのだ。だから低次の欲望だけで相手を求めていた場合、その出会いは失敗に終わるか、仮に出会ってもろくでもないことにしかならないのである。私は、身をもってそれを知ったのだった。

ヒロムなる人物に新宿で会ったのは、世紀も変わり、ようやく残暑も終わりかけた十月の初旬のことだったと思う。ヒロムといっても男性ではなく、もちろん女性である。本名は裕美（ひろみ）というようだったが、ヒロムは、イラストレーター志望の彼女が自ら作ったペンネームということであった。

「裕美って名前、嫌いなの」とヒロムは言った。

「どうして？」

「おじいちゃんがつけたんだけど、ある人物の名前から取ったから」

「ある人物って？」

「昭和天皇」

「裕仁様ね。そっち系の人だったんだ？」

「戦争には行ってないけど、そっち系だったの。でも、私はそっち系でもどっち系でもありたくないの。だから嫌いな」

「どっち系って？」私は笑って聞いた。

「私は、何ものにもなりたくないの」とヒロムはどこか思いつめた、頑なに口調で言った。「右にも、左にも、男にも女にもなりたくない。だからヒロムにしたの」

彼女は、二十歳前後に見えたが、実際は二十三歳ということであった。百五十センチにも満たない、痩せた、少年のような体型をした女性で、顔つきもまだ輪郭の定まっていない子供のようなあどけないものだった。ショートのは髪は完全な金髪で、古着を上手に着こなし、外交的な話し方を心得ていて、一見、ちょっとサブカルにはまった今風の子に見えたが、話は、怪しげな方向に向かっていた。

「私ね、薬をやっているの」

「薬って？」

「スピードとか」

「そうなんだ、でも、やばくない？」

「だから最近マジックマッシュルームとかやってる」

「やるとどうなるの？」

「ふわっとする」

「ふわっと？」

「うん、世界が回ったり。でもそれだけ」

「何のためにそんなことをするの？」

「私ね、頭の中に雑音がするの」

「雑音って？」

「テレビの砂嵐みたいに、ノイズがしているの。そのノイズをなくしたいのよ」

それから、話は瞑想や、スピリチュアルマスターの方向へと流れていった。どうやら、ヒロムは私のことを同種の間人となし、安心してラジニエシやクリシュナムルティのことを語りだした。私は、モーニング娘の中にでもいそうな金髪の若い女性が、このような話題を振ってくるとは思わなかったので、楽しげに聞いていた。しかし、ヒロムの口調の中には共感者に出合った喜びというよりも、今にも切れそうな張り詰めた弦のような真剣さがあり、それが私の胸をどこか苦しくさせた。

「私、毎朝、井の頭公園にいるんだよ」

「何してるの？」

「座禅組んでる」

私は、思わず笑い出してしまった。

「おかしい？」

「おかしくはないよ。でも、なんか笑えるじゃん」

ヒロムは心外そうにしていたが、私は小ばかにして笑ったわけではなかった。今時のギャルのような見た目のヒロムが、まだ夜も明けきらぬ早朝、井の頭公園の木の下で必死に座禅を組んでいる姿を想像すると、そのギャップが面白く感じられたのである。しかし、そこまでやるからには、きっとヒロムの絶望は、彼女の軽やかな口調や身振りよりもはるかに深いものであることが察せられた。

それから、ヒロムとは友人として二年ほど付き合った。当時、私に付き合っていた女性がいたこともあるが、彼女とは男女との関係にならなかった。実際は、粉をかけて何度か振られたこともあるし、ヒロムにも彼氏がいたりいなくなったりした。それでも、私たちはお互いをそのような俗世の関係とは異なる、特殊な席を占める存在とみなしており、男女の関係を越えた深いつながりを感じていたように思う。最後は、二人で伊豆にあてもない旅行に出かけた際、その一線を越えようとした私に嫌気がさしたのか、「しばらく会えない」というメールがきて、そのままになってしまった。半年ぐらいしてメールをすると、連絡先が変わっていたので、彼女とはもう二度と会うことはできない。

ヒロムには言わなかったが、知り合ってから一ヶ月ほど経ったある日、座禅する彼女の姿をこっそり見に行ったことがある。新宿で明け方まで徹マンをしていた私は、もしかしたらヒロムがいるかもしれないと思い、始発の電車に乗って井の頭公園に足を運んだ。別段、彼女がいようがいまいが、本当はどうでもよかったし、実際にいるとも思っていなかった。狭苦しい雀荘で一晩中、煙草の煙と欲得にまみれた汚い空気を吸っていたのだ。ちょうどよい朝の散歩になるのだろう。

散歩道から少し離れた、奥まった林の中にある巨大な銀杏の樹の下で、ヒロムは眼を閉じて座っていた。足はしっかりと結跏趺坐で組まれ、手は仏像のそれと同じく、法界定印を形作っていた。眼は固く閉じられていて、何か口の中でぶつぶつとつぶやいているようだったが、何を言っているのかわからなかった。

まだ暗い最中、金髪の少女——なぜか少女のように見えた——が必死に生きるか死ぬかの座禅をしている。その姿は美しくもあり、痛ましくもある、胸が打たれるものであった。ふと、どこ

からともなく大きな風の塊がやってきた。あたり一面の樹木の枝葉が、まるで危険を察した動物たちがいっせいに動き出すように、ザワザワカサカサと激しく揺れた。ヒロムの背後の銀杏の樹の枝葉も風に揉まれて激しく揺れ、黄金色の枯れ葉が頭上からシャワーのように降り注いだ。その金色のシャワーは、まるでヒロムの輝かしい未来と愛をそっと約束する恩寵のように見えた。

ヒロム、眼を開けてごらん。美しい光のシャワーが見えるよ、と私は念じた。

しかし、ヒロムは眼を開けなかった。眉間に皺を寄せ、苦しそうに呪文を唱えながら、まだ見ぬ光の可能性を探して、暗闇の中で煩悶していた。しかし、その姿は限りなく美しく、何びとたりとも彼女に近づくことは許されなかった。

地下にいる宇宙人の話

地下にいる宇宙人の話

「Nさん？」

とある金曜の夜、腰をかがめて、西船橋駅近くにあるマツキヨで歯磨き粉を物色していると（ここ数年ピュオーラのワイルドミント味しか使っていない）、背後から声がかかった。振り向くと、すぐ近くにある行きつけの美容室の琴美ちゃんであった。上の名前は知らない。自分の担当ではなかったし、時々、髪を洗ったり、頭をマッサージしてくれたりするだけの関係だったからだ。雑談を交わすこともあるが、自分は無口な時は無口なので、何を話したのかも覚えていなかった。

二十歳そこそこの彼女は、小柄で、人好きのする愛らしい容姿の持ち主だったが、アトピーということで、両手に薄くて黒い手袋をしていた。まだカットは任されておらず、シャンプーや、ブロー、マッサージ担当だった。病気に関するスピリチュアルな治療のことを話した記憶はあるが、その手袋を見る度に、少しかわいそうだな、と置いていたくらいだ。客商売だから、その黒い手袋は少しハンディキャップになるかもしれない。

しかし、どこか病んだ人間というものは、何も言わなくとも似たような相手のことがわかるし、近くに感じられるものだ。長い間慢性病に苦しんできた私にとって、この少し不幸な子は、どこか気になる存在だったのである。むろん、少しだけ、だが。

「もう上がり？」と私は聞いた。時刻は、夜九時を回っていた。

「はい、今日は店長がいないので早かったんです。Nさんは？」

「俺はさっきまで雀荘にいたけど、調子悪いから買い物して帰ろうかな、とか」

すると琴美ちゃんは、なにやら思い切った調子で聞いた。

「少し、時間ありますか？」

「あるよ」私は少し驚いたが、何気ない風を装って言った。「ちょっと飲んでく？」

「一つ、相談したいことがありますて」

「相談？」

「ええ、例のことです」と琴美ちゃんは秘密めかした様子で、私をじっと見つめて言った。

「ああ」と私は曖昧に答えたが、「例のこと」が何だったのか、さっぱり思い出すことはできなかった。

居酒屋というのも何なので、近くのイタリアン風のバーのような店に入った。実は、その日、麻雀で負けた私は金がなく、不愉快な相手に当たって機嫌も悪かったので、本当は飲みに行きたくなかったのだが、「例のこと」が気になってならなかったのである。もちろん、かわいらしい女性から誘われ、悪い気がしなかったこともあるが、

我々は席に着くと、それぞれカクテルとちょっとした創作料理風つまみを頼んだ。

「私、UFOを見たっていう話、しましたよね？」琴美ちゃんは突然、真剣な目つきで中核から入った。

「UFO？」私は、どういうわけか、その話をまったく思い出すことができなかった。

「小さい時の話です」

「ああ、そんなこと言ってたよね」私は、ごまかした。

「それで、最近も見erんです」

この時、飲み物が来た。私は、なんと行ってよいのかわからなかったので、「そうなんだ」と適当に言って、カシスオレンジを飲んだ。

「信じられませんか？」

「信じるよ」と私は言った。「でも、どこで見たの？」

「空で見るのではありません。毎晩、夢の中で見るんです」

「夢か」私は、少しほっとして言った。

「興味、ありませんか？」

「あるよ」と私は言った。「大いにある」

「それでね、ひどく奇妙な夢なんですけど、その中でいつも宇宙人に会うんです」

「宇宙人？ どんなの？」

「いえ、外見は普通の人なんですけど、光ってます」

「光ってるんだ？」私は、少し嘲笑的な顔を作ってしまったかもしれない。

「ええ、金色に光っているんですが、その人がUFOから出てきて、私にあるものを手渡すんです。そして、これは大事なものだから来るべき時が来るまであなたが預かって、どこかに隠しておくように、と言われるんです」

「興味深い話だね」

「それがこのところ、毎晩続くんです」

「毎晩？」私は眉をひそめた。

「毎晩です」と琴美ちゃんは言った。「でも、私はそれが何なのかわからないし、どこに隠したかも忘れてしまっているんです」

「奇妙な夢だね」と私はもっともらしく言った。「それはもしかすると、琴美ちゃんの祈りというか、願いのようなものが反映されているのかもしれないね」

「Nさん、前に言いましたよね？」琴美ちゃんは、私の一般論にまったく耳を貸さずに言った。

「何を言ったっけ？」私は、作り笑いを浮かべた。

「人間は、別の世界とつながることで人間になるって」

「そんなこと、言ったかな？」私は、まったく記憶がなかった。第一、美容室の雑談でそんなディープな話をするはずがない。

「だから、病気というものもそういう世界とつながるきっかけになるかもしれないんだから、琴

美ちゃんは人より大きな世界を生きているんだって」

「言ったかもしれないね」私は、何となくそんな風に励ました気がしてきたが、気がしてきただけであった。

「私は、わけのわからない世界を生きてきたんです」と琴美ちゃんは告白した。

「わけのわからない世界？」

「私は小さな頃からずっと、アトピーで心も体も苦しくて苦しくて仕方なかったんですけど、その分、掘り進んだ気がするんです」

「深くに？」

「そう、私たちの目に見える地上より、下の部分です」

「そうかもしれないね。君は、そんな顔をしてるもの」

「どんな顔ですか？」

「掘り進んだ人の顔」

すると琴美ちゃんは、なぜか嬉しそうに声を立てて笑った。それから、急に真面目な調子になって続けた。

「だから、私は空ではなく、地上の下の所でU F Oに出会った気がするんです」

「たぶん、そうだろうね」

「でも私、それは夢のようなものだと思っていました。私の頭の中だけの出来事で、現実とは関係ないって」

「うん、普通はそう思うだろうね」

「でも、最近、夢じゃないってわかったんです」

私は、話の雲行きが怪しくなることに懸念を覚えながら耳を傾けていた。

「現実に起こったってこと？」

「いいえ、あれは夢と現実の中間で起こっていることなんです」

「中間？」

「境です」

「霊とか、そういうのも中間の現象だろうね」と私は言った。「夢と現実の中間に現れる」

「ええ、中間です」と琴美ちゃんは真剣な調子で言った。「でも、中間で起こったことというのは、その人次第で夢にも現実にもなるんです」

「どういうこと？」

すると琴美ちゃんは何も答えずに、両手を差し出した。手袋をしていないその両手は絹のように真っ白だった。指が短く、ふっくらしているその手は、まるで生まれたての赤ん坊のそれのように見えた。

「治ってしまったんです」

「まじに？」私は、思わず相手の手を取った。そして物を扱うように遠慮なく、表にしたり、裏にしたり、ひっくり返して眺めたが、アトピーの痕跡はどこにもなかった。

「よかったじゃん」と私は手を戻して言った。「それで、他の箇所は？」

「足とかはまだあります」と琴美ちゃんは言った。「でも、その夢を見る度に、少しずつ減っている気がします。これはどういうことなのでしょう？」

「どうもこうもないよ」と私は言った。「治ったんだからそれでいいじゃん」

「そういうものでしょうか？」と琴美ちゃんは首を傾げて言った。

「そういうものだよ」と私は答えた。「優れたお医者さんに会うのもやぶ医者に会うのも同じでね、君が掘り進んで治療したんだから、結局、君の力なんだよ。君が自分で自分を治したんであって、宇宙人が治してくれたんじゃないよ。君が君の世界を広げることで、より大きく、力の強い、独自の、個性的な人間になった。そして、病も治してしまった。その事実があるだけだよ。だから、それでいいじゃん」

「私は、そういう答えが聞きたかったんです」と琴美ちゃんは安心した様子でつぶやくと、カクテルを一口飲んだ。

後日、美容室に行った時、手袋をしていない琴美ちゃんを見た。彼女は、前よりも生き生きして、迷いが無い人に見えた。カットが終わった後、マッサージをしてくれたが、「最近、ハマっている」という萌え系の深夜アニメの話ばかりしていて、私もそれに乗った。

お互い、UFOのことは一言も話さなかった。

芹姫

1 野心

数年前、私が、とある精神世界系の出版社の仕事をした時の話である。その都内にある小さな出版社の名前を聞いても、ほとんどの者が知らないだろう。主に自費出版を扱うその会社の社員は僅かに二人。疲れた顔をした六十代くらいの社長とその右腕らしい、無精ひげを生やした年齢不詳の青年とも中年ともつかぬ薄汚れた男がいるばかりで、「スピリチュアル」な業界特有の胡散臭いこぎれいさはどこにもなく、雑然として煙草の煙が充満した編集部は、昔ながらの編集プロダクションのようだった。

ライター募集などしていなかったにもかかわらず、私はホームページを見てアポを取り、ゴーストライターの仕事を引き受けることに成功した。とは言っても、社長と雑談をして、これまでの仕事の見本を見せると、「ライターだけじゃなくて、マックでデータ入稿までできるなら仕事はいくらでも回すよ」というイージーな答えだった。私はマックを売り払ってしまっていたのでそのことを告げると、「一台、余っているから持って行ってもいいよ」と言うので驚いたものだ。何でも、人手が足りなくて困っているとのことだった。

「一人、あっちの世界に行っちゃったからさ」と無精ひげを生やした編集部員のSが、回転椅子をぐるりとこちらに向け、話に加わってきた。

「あっちの世界って？」

「神様の方だよ」と男は笑った。

「そういうケース、多いんですか？」と私は聞いた。

「多いね、取り込まれちゃう人」とSは言った。「そうなるalmaz戻ってこない。他の体系の本なんか書けないから。逆に勧誘してきたりね」

「怖い世界ですね」と私は言った。

「怖いよ」と社長が言った。「でも、きみは大丈夫そうだね」

「そう見えますか？」

「なんか、逆に、ものすごくやっかいな感じがするよ」社長は笑った。「でも、それくらいじゃなくちゃね、我々は商売でやっているんだから」

私は、彼らの少しばかり斜に構えた態度や、シニカルな笑いを理解した。この手の世界では、著者に対して必要以上のリスペクトは厳禁なのだ。でなければ、相手の世界に取り込まれてしまう。あくまでもビジネスとして距離を取り、客観視しながら仕事を進めなくてはならない。逆に、そうでなければ新興宗教の教本のように、独善的で社会性を欠いた作品しか作ることはできないだろう。

しかし、私は彼らのような嘲笑的な態度を取る必要もないと感じていた。元々、求道者の一人であった私は、その時、ある種の限界点を突破し、ようやく自分なりの軸ができていたところであった。突然、訪れたエネルギーの奔流と全能感。私は、自分の力と確信とに酔っていた。どんな相手でも、価値観でも、乗り越える力があると過信していた。実を言えば、このような怪しげな出版社とコネクしたのも、魑魅魍魎うずまく世界で、自分の力を試してみたいというよこしまな野心があったからである。もちろん、今にして思えば、このような自負心に満ちた姿勢は未熟さを証明するものであり、ろくでもない果実しか実らせないものであるには違いなかったのだが...

早速、振られた仕事は「やばそうだから断ろうと思っていた」という案件であった。

「どんな相手なんですか？」と私は聞いた。

「よくわからないけどやばい」とSは言った。

「でも、傾向ってあるでしょ？ 悟り系とか、引き寄せ系とか、神様系とか」

「そんなんじゃないよ」とSは何やら言いにくそうに言った。「正直、もっとやばい系。電話で話したただけだけだね」

「どうやばいんです？」

「話せばわかるよ」とSは言葉を濁した。「たださ、強いて言えば、統合失調系かな。ああいうのが一番やばい。本にもしづらいし、対処法もないから。おれには無理だと思った。一緒にいたら頭がおかしくなりそうでね。きみも気をつけた方がいいよ」

私は、こんな曖昧な事前情報を元に、「芹姫」と名乗る怪しげな人物と会うことになったので

ある。

2 私のいない物語

「芹姫」こと芹沢涼子は、東京寄りの埼玉郊外に住んでいた。人ごみが苦手な都内には出て来たくないとのことで、私は芹姫が住む地元駅に出向くことになった。待ち合わせは午後の2時だった。老人とカラスしかいないようなさびれた駅で、薄汚れた商店街の向こう側には畑が広がっているだけの土地だった。4月の昼下がりであったにもかかわらず、なぜかわびしい秋の夕暮れといった空気が辺りを支配していた。

改札を出ると、一目で芹姫とわかる人物が立っていた。というよりも、そこには芹姫のほかに誰もいなかったのだから、彼女が私を待っていた人物であることは一目瞭然だったのだ。しかし、それは必然的な出会いのようにも感じた。彼女は、はるか昔からここで私を待っていたのだ、とさえ思えた。

どこか子供めいた白いワンピースを着た、美しく長い黒髪を持つ女性は、確かに、「姫」と名乗るだけの独特の存在感と気品があるように感じられた。しかし、その半ばがちゃ目の瞳はどこを見ているかわからなかったし、貧弱な顎の輪郭はゆがんでいて、人格の安定感はどこにも見出せなかった。妙に白っぽい血の気のない顔に、口紅ばかりが赤く浮き立っているその様子は、明らかに精神的な異常者の証のようにも見えた。しかも、よく見ると、「姫」というには年が行き過ぎているように感じた。30半ばか、それ以上かもしれない。私は、本能的な恐怖を覚えながら声をかけた。

「芹沢さんですか？」

すると芹姫は不思議そうに私の顔を眺めたまま、何も言わずにじっとしていた。不安に駆られた私が、再び何かを口にしようとする時、彼女はこう言った。

「あなたとお話するために、私はここにいるのですよ」

私たちは、駅から10分ほど無言で歩き、国道沿いにあるファミレスに入った。仮にも「姫」と名乗る女がそんな安っぽい店に入るのはいかにも不似合いにも思えたが、彼女はまるで常連のように、奥まった場所にある窓際の席を勝手に陣取った。お互いにドリンクバーで飲み物を持ってきて、一息ついた後、彼女は言った。

「ここに、不思議な物語があります。しかし、私はその物語の中にいません。でも、あなたはその物語を書き留める必要があります」

私は、ぎょっとして尋ねた。

「どういうことでしょう？」

「私には、私のことを語る事が許されていないのです。私には私の言葉がないのです。ですから、あなたは物語をあなたの言葉で書き留めてくださればいいのです」

「言葉がない？」

「今にわかります」と芹姫は言って、目を伏せ、紅茶をすすった。

3 宇宙人との対話

ここから先の会話は、私が手を加えることのできるようなものでもないし、解釈できることでもない。幸い、ボイスレコーダーで録音していたから記録されているが、もしも耳で聞いただけなら、彼女と何を話したのか、まったくもって記憶することはできなかつただろう。これは夢の言語である。夢が記憶できないように、日常の言語パターンを超えたものを我々は記憶することはおろか、表現することもできない。

分量やプライベートな問題もあり、3時間に亘るテープのすべてを開示することはできないので、彼女との対話がどんなものだったかを示す一端だけを録音されたままにここに記してみようと思う。しかし、事前に注意書き代わりに付け加えておくが、こんな会話をどんな形であれ公にすることが許されることなのかわからないし、この対話を読んだ人の精神にどのような影響を及ぼすかも想像できない。人によっては、何かを触発され、悪しき影響が出てしまうかもしれないし、何らかの不安を誘発してしまうかもしれない。夢は真夜中に見て、消えてしまうからこそ遠慮なくありのままの真実を突きつけてくる。もしもそれが日の光の下で生じたとしたら、大抵の夢は見るに耐えないものである。なぜなら、それは私たちの生きる範囲を超えた現象である場合が、ままたあるからである。

「元々人間である人は、人間であることの尊さを知らない」と芹姫は言った。

「芹姫さんは人間じゃないみたいですね」と私は言った。

「生物学的には人間です」

「魂が人間じゃない？」

「魂は誰にもわからないでしょ？」

「どういうこと？」

「人間になりたいと思っている魂」

「妖怪人間みたい」

「そのへんは内緒です。だから多い。私のような人は多い。だからね、人は知らない間に人でな

くなっていると思う。でもそれを自覚していないからきっと、痛みも感じない。だから人に対して、数学的な、言葉的な意味の何かしか感じない」

「人間が悪くなって、人間でなくなっているということ？」

「だって、だって意味がないでしょう？」

「何が？」

「よくなっても、悪くなくても、どっちだってよかったですよ。でも結局、意味がなくなったら、理由がなくなったら、生まれた意味がなくなったら、ここにこうして存在する意味がなくなったら、それは何かができるできないとかそういう問題ではなくて」

「それは絶対的な意味があるかないかということ？ 生きている意味が」

「絶対的な意味が欲しい」

「絶対的な意味がないと虚無？」

「あのね、絶対的な意味がある許された存在があるとして、もしもその存在をプラスにもマイナスにもできないとしたら、それは絶望なんです。絶望というのではなく、虚無なんですよ、無なんですよ。何かではない。絶望よりも何も無い。だから言葉にできない。誰も感覚的に体感したことはないから」

「虚無に落ちる人はいる。寸前まで行く人は」

「でもね、虚無という名前の感覚を体感する人はいるんですよ」

「それは生きている意味がなくなる恐怖？」

「だからね、本当の、言葉にできないね、存在しない、無というものを実現する、体感する人間はたぶん存在しない。それは人間ではない。もしも体感している人間がいるというのなら、それはおかしい。体感したことによって人は狂う。生きてなんかいられない、と思う」

「恐怖を感じているうちは落ちていないのかもしれませんがね」と私は言った。「ぎりぎりで踏みとどまることが恐怖」

「私は、たいしたことない。ただほんとわずかな・・・だけど私という存在は無意味だ。私ではなく、他の何かが存在したらよかった。この先、それは悲しい。・・・（聞き取れず）と認識されるのが悲しい。私は、生まれてこないほうが良かった」

「それは不幸になるから？ 自分が？ 誰かの役に立てないから？」

「私は、存在自体が意味がなかった。プラスでもマイナスでもなく。無意味だ。こんな・・・（音、聞き取れず）でなければよかった。ごめんなさい。わけわからない話。両親と私と違うのは、精神レベルでも性格レベルでも同じなのに、あの人たちの性格を受け継いでいて、確かにそれはわかるのに、根本が違うと感じるのは、そういうところから、生まれる・・・わかっているのに。電波さんだから言わないの、こういう話は。感覚的なものだし、理屈もつかない、理由もつかない、証拠もない。ただ、認識しているだけ。そんなのは、異常だから。ただ遺伝子も血もつながっているのに違うと感じるし、通常の人間のDNAと遺伝子も形態も同じなのに、人間の形をしているのに」

「宇宙人みたいに感じているということ？」

「わからない。でもそれは、みんな同じなんでしょうね、とずっと思っていた。今も思っている。でも、たまに戻ってくるものがあるの」

「戻ってくる？ 何が戻ってくるの？」

「なんか、全然違うもの。説明つかない。それは無を表現すると同じ感じ。だから無を表現することは難しいからそれと同じ感じ」

「それは虚無感とは違う？」

「全然違う」

「ネガティブでもないんだ？」

「説明がつかない。ただ、魂と・・・だから人間という存在は意味を見つけるために、わかんない。見つけたくて生きているのかもしれない。でも、私はたぶん、きっと意味はあって、そのために何をするのがあって、生きているような気がする。私がきっと主体的に見えないのはそれもあるし」

「意味があるってこと？」

「意味はない。ただのひとつの末端の何か。だからそれは自分という、芹沢涼子という人間ではなくて、何か、本当に、無に帰る何か。わけわからないですね、芹姫と名乗ることで、きっと話してしまうのだろうなって。時々、私という人間や肉体というか精神が傷つけられているから。時々、そういう空間に出ちゃう。なんでもない」

「幽体離脱しているみたい？」

「だから、私という何かがここに居る時間に、別の何かがここにいるべきだった。そしたらきっと、非常に有意義な何かを得られたと思うから。同じ結論であったとしても、同じ流れであったとしても、と、思う」

「芹姫さんはどこか他の星から来た人みたいですね」

「他の星からは来ていない。地球上からしか生まれていない」

「でも、人間じゃないみたい」

「人ですよ。体も遺伝子も」

「じゃあ、地底人。地底から来たの」

「地底ですか？」芹姫はびっくりした様子で言った。

「地底に存在していた前の世代の人間みたい」

「S F 的ですね」

「その魂が生きづらい」

「それは小説が一本書けますね」芹姫は、急に皮肉めいた口調で言った。「でも、私の話は小説にすらならないんです。なぜなら、どこにも主人公がいないからです」

この時すでに、私は、彼女の本を書くことを断念していた。彼女の宇宙を表現することは私の手に余ることだった。何とか、互角に渡り合っているように装っていたが、実を言えば芹姫の存在感に圧倒されていた。彼女には、私の言葉が通用しないことは明白だった。エゴの超克という領域に、最初から彼女はいなかったのだ。彼女は最初から救われている存在であると同時に、真

実そのものであるがゆえにそれを伝えることも表現することもできないという致命的なジレンマを抱えた薄幸の存在だった。

彼女のことを理解する者はおそらく誰一人としていなかったことだろう。理解者も、愛する者もいなかったことだろう。もしかしたら一人くらいはいたかもしれないが、その人もまた浮世の荒波に耐えることはできず、藻屑となって消えてしまったことだろう。そこには誰知らぬ偉大な物語があったのかもしれない。しかし、それは誰も知らない物語だ。その物語をこそ誰かが書くべきなのかもしれないが、そのストーリーが記された石版はきっと、誰にも発掘されることはないだろう。真実の物語というものは、地中深くに眠っているものなのである。

私は、本能的に彼女の真実を感じ取っていた。その絶望と愛の深さも理解していた。だからこそ彼女は私に助けを求めたのだ。自分のことを理解し、表現してくれる媒介者として、初めて会った私に全面的に身を任せたのだ。しかし、当時の私にとって、彼女は自分の存在を脅かす巨大な矛盾そのものに見えた。そう、私は敗北宣言をし、尻尾を巻いて逃げ出したのである。

あのまま彼女と一緒にいたら、間違いなく虚無以前の「無」の中に取り込まれ、逃げられなくなっていただろう。あの時の私にはまだ、その「無」の世界を乗り越えるだけの力を持っていなかった。私にとって、彼女はまさに宇宙人そのものであり、人間的な思考の彼岸にある、存在以前の神の具現化そのものであった。

4 祝福

芹姫との会話は、この小説を書くにあたって意を決してテープを起こすまでまったくもって覚えていなかったし、彼女の存在さえ、私の人生からきれいに抹消されていた。芹沢涼子は、私の人生を通り過ぎた様々な道化師や、凡人愚人、奇人変人たちの演舞者の一人に過ぎなかった。「あんな人もいたな」と思い出すことはあっても、それはまさに夢の中の現象のようにおぼろに感じるだけだった。するうち、本当にそんな人間がいたのかさえ、疑わしくなってきた。夢は、記憶に残らないものなのである。

しかし、例えこの世にはあり得ない現象ではあっても、その強烈な光輝によって、人間のもっとも深い部分に刻印される体験というものがある。それは日常生活の中であろうが、夢の中であろうが、前世の記憶であろうが、集合無意識の体験であろうがかかわりなく、その人の魂の深奥の部分に刻み込まれ、知らず知らず彼の人生を規定するものとなる。

人間の本質を規定するものは何かといえ、積み重ねてきた経験や知識でも、それによって形作られた「自我」でも、才能でも、環境でもない。それは、真実の強度である。

つまり、量ではなく、質なのだ。たった一回でも、遥か高みへ、あるいは恐るべき深さを体感すると、その体験は意識的にであれ、無意識的にであれ、一人の人間の全人生を規定するものとなる。彼はその地点からしか歩けないし、物事を見ることはできない。その時点で、一人の人間の人生の中で最も強度のある体験こそが、彼の世界の最果てであり、深さ、高さの限界点なのである。イエス・キリストの十字架の前に跪いた人々は、その十字架を背負って生きていくことになるだろう。ここに、宗教が始まるのだ。だが、真に宗教的な人間は、十字架の先へと歩き出さねばならない...

さて、3時間余りの取材を終えた我々は、ファミレスを出て駅への帰途についた。芹姫の家（実家ということだった）とは逆方向とのことであつたが、駅まで見送ってくれることになった。外に出ると、日は落ちかけていて、世界は幻想的な赤銅色のベールに包まれていた。私と芹姫は、来た時と同様、ひと気ない侘しい裏道を黙々と歩いた。この見知らぬ街で、このような奇妙な女と二人きりで歩いていることに運命の不思議を感じたが、もう二度と会うこともないのだと思うと、相手に対して優しい気持ちになっていた。もしかすると、それは気まぐれな憐憫のようなものだったのかもしれない。

みすばらしい公園の傍を通りかかった時、ある種、吹っ切れた気持ちになっていた私は、「一服しませんか？」とくだけた調子で誘った。芹姫はどこかおどおどした様子でうなずいた。何

やら、個人的な接近を警戒している風だったが、世慣れていない様が愛らしくもあった。煙草が切れていたの、私は古ぼけた酒屋の横に自販機を見つけ、購入しようとした。ジープのポケットから小銭を取り出した時、ふとした拍子で50円玉がこぼれ落ち、アスファルトの上を転がって、鉄柵のあるどぶの中に落ちてしまった。私が無視して煙草を買おうとした時のことである。目の横にぎよっとする光景が飛び込んできた。芹姫がどぶ川の鉄柵を外し、50円玉を拾おうとしているのである。

「汚れるからいいですよ」と私はあわてて言った。

しかし、鉄柵を外した芹姫は道端にしゃがみ込み、迷いなくどぶ水の中に手を伸ばして、小銭を拾った。そして、バッグから取り出した色褪せたピンク色のハンカチで丁寧に50円玉をぬぐうと、うれしそうに――本当にうれしそうに――笑って、その銀色に光る小さな硬貨を道路にひぎをついたまま差し出したのである。50円玉はぴかぴかに光っていたが、その生白い骨ばった手には泥水のしずくがまだらにつき、袖口にも黒い染みがついていた。

瞬間、彼女の額が黄金色に発光した。最後の陽光がその蒼白い額を打ち、知らず知らず、偉大な恩寵を授けていたのである。それは、誰一人として彼女を認めることがなくとも、誰かが彼女を愛していて、祝福していることの証であった。彼女は、愛されていたし、許されていた。しかし、彼女自身は、その祝福を受け取ることも、愛されていることも理解していないのだ。そこに彼女の美しさのすべてがあり、不幸の原因があった。

その黄金色の光の中で、中年の病的な女は少女のようにあどけなく微笑み、見返りのない愛を差し出している。どぶ水に汚れていて、ゆがんだ顔をしているが、このような美しい女を私は知らなかったし、見たことも聞いたこともなかった。それはこの世の美ではなく、別の世界からやって来たがゆえに、決して汚されることのない純真の美であった。しかし、その美しさは恐ろしくもあった。あまりにも尊いがゆえに、俗人には触れることのできない禁忌の領域からやってきた何ものかであった。

このような人間の奉仕を遠慮なく受け取る資格のある人間が、いったいどれだけいるだろう？ 私は呆然としたまま、しばらくその50円玉を受け取ることができなかった。いや、受け取りはしたが、こともあろうに、彼女の目の前で、そのまま自販機の投入口に50円玉を入れてしまったのである。それは、私の人生で最大の失敗の一つであり、この失敗こそが（書きながら気づいたのだが）、芹姫という存在を記憶の底に封印する原因となっているのであった。私は、彼女の差し出したこの世のものとも思えぬ貴重な宝石を、大量生産されたひと箱の煙草に代えてしまったのである。

動揺した私は、「ごめんなさい、やっぱり帰ります、お見送りはここで結構です」と言って、

どぶ川の傍にしゃがんだままの芹姫を置き去りに、逃げるようにその場から走り去ってしまった。そして煙草を駅のゴミ箱に投げ捨てると、その日から、二度と煙草を吸うことはなかった。

「あれだけヘビースモーカーだったのに、よく煙草やめれたね？」と様々な人から言われたものだが、これが私の禁煙した理由である。

自己浄化の方法と心身脱落について

自己浄化の方法と心身脱落について

肉体的、及び心理的傷みとは何のためにあるのか？ どうやったらそれは一人の人間から消えうせるのか？ この大問題に対して、とある体験から一つの出口を見出したので、もしも肉体的病、及び極度の精神的苦悩がある方は参照にされたい。ただし、これは個人的な一例に過ぎないことを先に明記しておく。

●肉体的病の浄化について

自分は幼少期から30年間、ある慢性的病（呼吸器系の病とだけ言っておく）に苦しめられてきた人間で、拙著に書き記したような「私」から「世界」への主体的認識の転換（俗に言う悟り体験？）があった後も、「病の苦しみを取り除きたい、治したい、排除したい」という本能的欲求を消すことはできなかった。自我を形成しはじめた頃からの生理的条件付けが、今もなお自分自身を支配していた。現代の医学に限界があるのなら、と、ある種の心霊治療に心引かれたこともある。リスクを犯した外科手術を施しても、それは数年すると悪化してしまうのである。

ところが、先日のとある体験を境に、「苦しみの受容」による劇的な治癒という現象が生じたのでここに記しておきたい。しかし、これは非常にデリケートな問題であることは理解しているので、できうる限り虚飾なく、客観的に表現しなくてはならない。とは言っても日が経っていないこともあり、ある種の高揚が滲み出てしまうことは避けがたい。もちろん、後々この体験を客観視し、その原理構造を論理化することも可能だろう。今は「体験レポート」として、ある種の臨場感を損なわぬよう書き進めてみたいと思う。

猛暑日が続いたとある夏の晩（2011年8月20日）のことである。20年前の呼吸器の手術の後遺症により、自分は激しい肉体的苦痛に苛まされていた。このような激しい苦痛の症状が出るのは3度目で、前は夜中に鎮痛剤を求め、一晩で救急病棟に2回ほど駆け込んだこともある。それでも痛みは治まらず、顔面は腫れ上がり、バファリンを1日に10錠飲んでいて（これは頭が朦朧とするばかりで効かなかったが、あれは数を飲んでも効果が上がるものではないと医者から注意された）。しかし、今年は一週間ばかり鈍痛が続くものの、そこまでの激痛は始まらず、顔面も腫れ上がらず、ほっとしていたところでついにそれが来た。

最初、ああ、ついてないなあ、と思い、痛みを耐えていた。前のようにならないことを祈るのみだった。人間には、決して耐えられぬ肉体的苦痛というものがあるのである。ただ、どちらにしろ逃げられないのなら、この痛みをとことん味わって何かを学ぼう、と腹をくくって待つことにした。ここまでの苦痛は、逆に貴重な体験であろう、と。

この時、ひよんなことを思いついた。それは、この痛みは、誰かの痛みの肩代わりなのではないだろうか、というものであった。世界には苦しみの総量があり、自分がその苦しみの一つを担っているのだ、と。これは思いつきというよりも、なぜか間違いのない事実を感じられた。誰か見知らぬ罪なき子供の痛みを肩代わりしているのなら、もっと味わいたい、自分が味わって苦しみ、痛みを浄化してやりたい。すると、「もっと痛くなれ、もっとこい」という風に、いつもと真逆の態度で痛みに関係することができた。痛みの中に入り込み、とことん味わう。それは苦痛ではなく、喜びなのだ。苦とは、天から授けられた恩寵なのだ。母親が、自分の子供の痛みを肩代わりできるというのなら、こんな風に思うに違いない。だがそれを自分の子供ではなく、見知らぬ罪なき子供たちのために、と真に感じる如果能够できれば、それは愛情を超えた慈悲になることに気づいた。そこには、我が子への執着さえないからである。

「世界に無数に存在する苦しみの一つを消すために、あなたの痛みは存在する」

こんな宗教がかった言葉が脳裏に生まれた。誰もが、痛み、苦しみを請け負っていたのである。

痛みの排除ではなく、受容が始まった。痛みは自分の中に入り込み、溶け込み、消えていった。すると不思議と痛みは痛みでなくなり、喜びとなった。何か、ドーパミンのような脳内物質が出たのは間違いないだろう。しかし、それは単に心理的トリックによるものではなく、「慈悲の場」とでもいうべき何かが自分の中に生まれたことによるものだという確信があった。

慈悲は、痛みを溶かし去り、足の下から抜け落ちるように消していった。それでも、物理的苦痛は治まらなかったが、心理的側面において苦痛はもはや苦痛ではなかったので、むしろ貴重な時間となった。もっと苦痛が長引いて欲しいとさえ思った。一分一秒でも長く。これから、自分は肉体的不快感、苦痛に対して、「自分の痛み」とは思わないことだろう。それは「世界の痛み」であり、自分に与えられた痛みは、その人の使命、役割に合わせて盛られた分量なのだ、誰かの痛みを消しているのだ、と。すると長期に亘って自分を苦しめてきた慢性的な不快感さえ、「痛みへの感謝」へ変わった。

翌朝、目覚めると、痛みはきれいさっぱり消えうせていた。それどころか、長年に亘って自分を苦しめてきた慢性病による不快な症状もほとんどなくなっていることに気づいた（よく、「癌に感謝して治った」などという奇跡話を耳にするが、自分にとってこの病の克服は同様の意味があった。まともに呼吸ができるということの解放感！）。これが束の間の恩寵ではなく、真の自己治癒であることに疑いはなかったが、それでも「たまたまではないか」と恐怖した。とりわけ、慢性病は、数十年に亘って自分を苦しめてきた物理的な障害であり、根本的に治るものではないからだ。実際、幾度か隆起したが、それはもはや不快なものではなく、苦しみを受容する度に、症状が劇的に治まるという肉体の不思議を味わった。今では、何一つ薬を使っていない。

どちらにしろ、「苦」は「苦」ではなくなった。一切は感謝によって受容されることにより、浄化されて消えてゆく。心のあり方が、肉体にも影響を及ぼすことは明白であった。もちろん、心理的メカニズムと肉体的なそれは一つのものであり、ある種の脳内物質によって、唯物論的に説明がつく現象なのかもしれない。しかし、その源にあるものは、個人的枠組みの外からやってきた慈悲の流れそのものであることに疑いはなかった。

●精神的葛藤の浄化、心身脱落について

さて、この肉体的苦痛の浄化方法の発見は、すぐさま精神的苦痛、葛藤の浄化に応用できることに気づいた。それは葛藤による苦しみに対し、次のような心構えを持つことを意味する。

世界には今、苦しみの総量がある。個人的苦しみというものは存在しない。何か人から葛藤を与えられた時、悲しい時、苦しい時、それはあなたが担い、浄化すべき仕事として与えられた「苦」なのである。あなたがそれに気づき、味わい尽くし、消してゆくことは、誰かを助けていることになるのである。それらに感謝し、受容し、味わうこと。戦わないこと。他者の「苦」として受け入れること。世界の一員としての使命感。

実際、これを実践すると、不思議なことに「葛藤」「苦」が抜けてゆくのがわかった。病が抜ける感覚と同じであった。ありとあらゆる葛藤が抜け落ち、自分の中に留まらない。下へ、下へ、抜け落ちてゆく。

ああ、この葛藤、苦しみはもはや自分の「我」のものでさえない。これは他人の「我」だなどという感覚があった。これまで「自我」が縮小すれば「世界」は拡大する、という認識はあった。しかし、「自我」はあくまで自我であり、忌むべきものであった。ところが、もはや「自我」さえ存在しないことに気づいた。それは世界に集積された我の一部であり、つまり、「他性の我」なのだ、と。誰かの味わうべき心理的葛藤を、今、自分が世界から与えられ、それを味わって浄化している。それは心理的トリックではなく、明晰な事実だと感じられた。すると自我の底蓋がなくなり、抜け落ちて、一向に留まらなかった。何か感情が溢れても、それは真下に抜け落ちてゆく。何か葛藤、疑念が生まれる度、「ああ、来たな、喜んで」と思えた。それは誰かの葛藤であり、苦しみののだ。

苦しみに「個性」は存在しなかった。その苦しみは「我」のものではないゆえに、自分の中につかまる場所を持たなかった。すべての葛藤はつかまる場所をなくして滑落し、下へ、下へと滑り落ちてゆく。すると瞬間的に生じる葛藤のみならず、これまで贅肉のようになって蓄積し、自分のパイプを詰まらせていた自我の残り滓が、次第に浄化されることがわかった。それは自我の完全な終焉を意味するのではなく、瞬間、瞬間に生じた葛藤を滑落させるパイプを太く、きれいに掃除する感覚であった。もはや、自分の中には何一つ本質的葛藤は留まらないのだ。

一晩、歩きながらその状態を味わい、抜け落ちて留まらない心身状態を心行くまで楽しんだ。星は美しく、空気は澄み渡り、浄化された世界は感謝と慈悲に満ち満ちていた。自己浄化は遍満する喜び、慈悲の終わりのなきシャワーであり、世界をも浄化する力を持つことを知った。世界の浄化とはすなわち、他者の苦しみ、悲しみの理解であり、受容である。しかもこの慈悲深きエネルギーの流れは、悟りを追い求めるようないちかばちかの賭けではなく、感謝と受容のプロセスを通して、誰にでも味わえるものなのだ。

禅用語に、「心身脱落」という言葉がある。これは禅宗の祖である道元禅師の言葉であるが、「心」も「体」も幻想であると見抜き、執着しないことで、それはこの世から抜け落ちてゆくといった意味らしい。自分の場合も「抜け落ちる」という感覚は同じであり、これは禅の世界という「心身脱落」なのかな、と思うようになった。もちろん、禅僧でもなんでもなく、座禅さえまともにしたことがない自分が「心身脱落した」と言うのはおこがましいし、勘違いなのかもしれないが、自分の自我の底が抜け落ちて、身体的苦痛も、精神的葛藤も何も留まらない状態は、「心身脱落」という言葉がどうしてもぴったりくるので、勝手にこの禅用語を使わせてもらっている。むろん、それは禅の世界の「心身脱落」と違う、というのなら別段反論はしない。単に、「葛藤、苦痛が自ずと抜け落ちていく状態」と言い直してもいいのだから。

ただし、この状態は、完全に自我がなくなるのとは違う。なぜなら、心身脱落しても、常に「我」は生まれるからである。不条理な現象に満ち満ちた日常生活の中で、「葛藤」は際限なく生まれる（それは確認した）。時には、あまりの不条理に出会うと、葛藤が溢れ出し、浄化装置が根詰まりを起こすことさえある。それでも、その葛藤、苦しみは、ほどなく抜け落ちてゆく。前は、シャワーのように小さな穴しか開いていなかったものが、何百倍もの穴の大きさになった気がする。その穴からは、時に、巨大な滝のように水しぶきをあげて落ちるような大きな悲しみの感情もあるだろう。誰かに、水しぶきを浴びせて迷惑をかけてしまうことさえあるかもしれない。しかし、それは多少時間がかかることがあっても、必ず抜け落ちる。これは肉体的苦痛に対するのと同様、「受容」と「浄化」の原理によるものである。

さて、ここで「悟り」と呼ばれる現象についてもひとこと述べておきたい。徹底した「自我」凝視による「自己解放」の体験から、「我」は幻想なりと認識することは、自我を中心におかない生き方の最初の一步として極めて重要なプロセスである（これは拙著で記した体験である）。しかし、瞑想によるものであれ、座禅の果てによるものであれ、クンダリーニの上昇によるものであれ、「自己解放」の神秘体験は、エクスタシーを伴うがゆえに、この体験を「悟り」のゴールとし、これで絶対幸福に至ったとする幻想が生じやすい。また、仮に体験があっても、それを知的イメージとして硬化してしまう限り、自我は体験とセットになって肯定されることによって拡大し、魔境に陥る危険性もある。

心身脱落は、刹那の見性とは真逆のベクトルを持った動的方法論である。それは、一切の体験を「気づき」と「受容」によって浄化し、落としてゆく現在進行形の作業であり（この時には神秘体験さえ執着せず、落としていかねばならない）、それによって貫通した太いパイプに、慈悲のエネルギーを貫通させることである。この終わりなき「苦しみ」、「悲しみ」の受容が自身の内的浄化から、他者のそれへと及ぶとき、「慈悲」が拡がり、世界は澄み渡る。それゆえに、この浄化作業に終わりはなく、ゴールなどというものは存在しない。しかし、慈悲による万人の悲しみの浄化それ自体の中に喜びがあり、創造があり、真の解放があるのだ。

心身脱落とは、自己の「悲しみ」だけではなく、万人の「悲しみ」を受容し、落とし、世界に還元する「慈悲の場としての身体構造の確立」のことを言うのである。

（エッセイ集「窓」第18集（明窓出版）収録作品）

ダンテス・ダイジによる超越的境地の肉体的表現について

ダンテス・ダイジによる超越的境地の肉体的表現について

今、スピリチュアルと呼ばれる世界の表現の多くは手垢がつき、何の共感もないし、魅力も感じないというのが私の本音であり、本メルマガでもその手の話題は意図的に避けてきたのだが（アセンションやら、引き寄せやら、スピリチュアルのごった煮のようなブログは嫌というほどあるではないか）、宗教的アプローチで自我を超えた境地にある存在として、稀有なる表現者の一人であったダンテス・ダイジについて語ることは「無我表現」という見地からも許されることだろう。

★ダンテス・ダイジ＝（1950年2月13日－1987年12月11日）は東京都出身のタントラ・ヨーガ・グル、座禅老師。本名は雨宮第二。物心ついて以来、誰に教わることなく座禅瞑想を続ける少年だった。1968年、師・伊服部隆彦の詩集「無為隆彦詩集」を読んだ後に心身脱落・大悟徹底。以降、古神道の体得を目指し、沖縄県首里にて臨済宗の老師・木村虎山のもとで見性を許される。その後、インドでババジ直系のクンダリニー・ヨーガを通じて究極の解脱に達したとされるが、1987年に東京都福生市の自宅にてガス爆発により死亡。自殺、事故両説あるが未だに事実是不明である。（ウィキペディアより）

私は彼のヨーガの技法や、禅の只管打座の技法をまとめた『ニルヴァーナのプロセスとテクニック』などの修行本（一部にはオウム真理教の修行のネタ本とされる）にはほとんど興味を惹かれない。呼吸法等の延長による神秘体験がもたらす覚醒というものは肉体的にも物理的な頭脳という面においても、たいへんな危険が伴い、また意識の人工的拡大体験がエゴと結びつくことの危険性について懸念する。これは頑なな真我論者にも見受けられるが、世界の中核に何らかの実在（永遠の自己であれ何であれ）を認め、それと合一する体験なり認識は、エゴの否定、放棄、破壊による「私」なき世界認識の可能性を奪いかねない方法論であると感じる。（私がお勧めするのは日常の中、自己中心的で醜悪なエゴの働きをただただ見つめる一点突破であり、クリシュナムルティの言うところの選択なき気づき、すなわち動的瞑想である。）

只管打座による内観はともかく、クンダリニー・ヨーガによるエネルギーの上昇は、その人の人格、生活を崩壊させる危険さえあるだろう。クリシュナムルティはこの技法のことをひとこと「気狂いになりますよ」と否定していたらしいが、少なくとも日常生活の中で開かれた真実を体現する時代において、一般的に必要とされる技法でないとは思ふ。もちろん、正しい師がいれば別なのかもしれないが、まがいものが横行する現代において、あえてその方法を選ぶ必要もないのではなかろうか。

確かに、ダンテス・ダイジは危険な存在である。ヨーガの技法うんぬんではなく、存在それ自

体がラディカルにすぎるのである。彼は、あまりにも行きすぎているし、あるいは、あまりにもクラシカルすぎる。その行きすぎである点が、彼がマイナーなカリスマに留まる理由である。それにしても、ダイジの残した代表作である『アメジスト・タブレット・プロローグ』を見る限り、現代の“スピリチュアルままごと”と比べて何と真剣な響きに満ちていることか！

冥想は、最もあたりまえで気楽な

久遠の戯れである。

しかし、現代人にとっては、

自己理解と直観にともなうエゴの消滅は、

すなわち真実の冥想修行は、

発狂や死の覚悟を必要とせざるを得ない。

(アメジスト・タブレット・プロローグp48)

禅でよく言われる、

自我の死、大死一番とは何をさしているのだろうか？

もちろん、自我の死、あるいは、

クンダリーニー・ヨーガにおける、

肉体上の死と復活が、

善悪を越えた

まったく新しい善悪という自由を実現することは、真実である。

自我の死とは、自我の知覚する全宇宙の死であり、一切万象の滅尽であり、一切

万象それ自身の目覚めである。

(アメジスト・タブレット・プロローグp66)

空とは、体験ではないし、

まして、神秘体験とか、実在体験とか、宇宙意識の体験なぞといったガラクタで

は、断じてない

空もしくはニルヴァーナとは、

心身脱落であり、全体脱落である。

宇宙脱落であり、絶対者脱落である。

空もしくはニルヴァーナには

どのような痕跡もない。

神もしくは絶対者のあとかたさえもない。

しかも、

それは、目覚め切っている。

充実し切っている。

(アメジスト・タブレット・プロローグp172)

ダイジの詩作には、既存の宗教的覚者には見られない、ある肉体的境地がうかがえる。私は「肉体的」と言ったが、これは「実存的」と言い換えてもよいかもしれないし、「個人的」と大胆に翻訳してもよいだろう。すなわち、エゴを超越した経験、体験、感覚というものは、逆説的に、個人という肉体を通してのみこの形而下の世界に顕現されるということである。質的変容が生じた肉体には、必ず独自の身振り、笑い方、話し方、関係の仕方という個性が生じる（人格の成熟とは関係がない）。ここにおいて初めて、“超越的個人性”とでも言うべきものがこの地にきらめ

きわたるのである。例えば、以下のような言葉にそれは顕れている。

救世主とは

君が死んだ君自身のことにはほかならない

救世主とは

救済すべき何ものもないことに

目覚めた君自身のことにはほかならない

(アメジスト・タブレット・プロローグp18)

君が慈愛を感じたり

君が何かを愛したりすることはない

君がすでに死んでいるのなら

慈愛のみが満ち渡っている

愛のみが満ち渡っている

(アメジスト・タブレット・プロローグp21)

真の表現者は常に、自ら表現するものへ一個人として全的責任を持ち、リスクを背負う。その背水の覚悟こそが――痛ましいまでの創造者としての圧倒的な孤独な運命の自覚こそが――一個人という枠を超えて他者に届く祈りのバイブレーションとなるのである。誰かが唱えた真実の棒読みは残念ながら、宇宙的真実の体得ではなく、その人が外から導入した観念と一体化しているにすぎないことの証なのだ。

ダイジの詩作は、あの超越的原理を感得したことによる力強さのみならず、時に、柔弱と言ってよいほどに極めて繊細で、人の弱さに対する慈悲に満ちており、それが一つの魅力になっている。その繊細さは、道元へのシンパシーからも感じられる。

人間になれなかった道元かわいそうな道元よ

あなたは その全生涯を

奥深き冷厳な山林にありて

人間になろうと全身全霊で

努め励んだ

今・吾・ここにて

道元老古仏に深く深く深く

帰依したてまつります

あなたは 人間になろうとして

只管打座の日々を送り

「正法眼蔵」を著述した

あなたの言う正法眼蔵が

人間そのものに他ならぬことを

私は知っている

しかもあなたは

決して人間になれなかった

道元よ

あなたはあまりにも弱すぎて

人間ドラマを愛することはできても

人間ドラマを演ずることはできなかつた

そして肺結核で若死して

その人間への仏道修行を閉じた

あなたは煩悩を生きるには

余りにも弱すぎたのだ

今・吾・ここにて

道元老古仏に深く深く深く

帰依したてまつします

あなたは人間の限りない喜びと悲しみ

そして虚無と

それら一切を現成せしめる山河大地とを

果てしなく見切った

だがあなたは「修証一如」という

悪知恵によって

煩悩の汚濁を見渡したが

ついに煩悩そのものへは帰れなかつた

太郎や花子は煩悩そのものを生きている

煩悩そのものの人間ドラマには

煩悩も悟りもない

かわいそうな道元よ

あなたは すべてを知りすぎた

今・吾・ここにて

道元老古仏に深く深く深く

帰依したてまつります

あなたは貧しい仏道者だ

余りにも心の貧しい仏道者だ

あなたは終生

心貧しき仏道者として生き切り

ついに豊かな人間達にはなれなかった

二十世紀末の今日

フーテン娘は

赤ん坊をコインロッカーの中に捨てる

デリケートな現代人達は

山林の自然を恐れて

都会のネオンサインの中へ逃げる

平凡なサラリーマンの一家団らんの中には

肥大した自意識同士の

言葉にならない戦いがあり

工場労働を本当に楽しんでいる工員は

一人としていない

悟りという愛情ならぬ愛情を

求める気力のない哲学青年は

流行歌手の歌声と

睡眠薬とガス管の中に自殺する

そして私は

これら本当に豊かな

人間の苦悩という営みが

二十世紀末の今日だけのものでないことを知っている

そして道元よ

あなたはこれらあらゆる人間達の

豊かな営みそのものになろうとして

ついになりえなかった

今・吾・ここにて

道元老古仏に深く深く深く

帰依したてまつります

今・私は説法しよう

あなたの古仏としての営みは

山河大地のみではなく

あらゆる人間達の営みそのものであったことを

森羅万象や無数の生命達の

営みなどどうでもよい

あなたの只管打座は

人間の限りなく豊かな営みそのものであった

万里一条鉄の大生命などどうでもいい

私は 今・ここで

あなたとともに叫ぶ

私は人間だ

果てしない喜びと悲しみとを持った

たった一人の

かけがえなく豊かな人間そのものだ

今・吾・ここにて

人間道元に深く深く深く

帰依したてまつります

(「絶対無の戯れ」より)

道元老古仏は

その究極性においては

釈迦老古仏よりも

余りにも純粹だ。

それゆえ

道元の只管打座は

いかなる意味でも

釈迦や老子などの

円熟に至ることはなかった。

道元よ

余りにも余りにも純粹透明な何者かよ。

21世紀の水晶の中の水晶よ。

(アメジスト・タブレット・プロローグp30)

これらの詩作を通して、我々は確かに、この地に二本の足で立って存在し、泣き、笑い、愛し、一つの運命を十全に生きた一人の人間に出会うことができるだろう。一人の血の通った、強くもあり弱くもある、温かみある人間の息吹が感じられることだろう。個人性を超えた体験、境地が個人という肉体を通して現れる——この逆説は、受肉化した神であるところのキリスト的存在の秘密でもある。普遍的真実は、常に、「究極の個人性」を通してのみ表現され得るのである。

我々は、真実を感得し、それを自らの肉体でもって表現するために生きている。すなわち、愛

の顕現のために、あなたの手と言葉、あなたの微笑み、あなたの眼差しはあるのである。その肉体的表現の最も率直な例として、最後に、ダイジの次の作品を紹介して、この稿を終えたいと思う。

だいじょうぶだよ 君は必ず死ぬ

だいじょうぶだよ

君は必ず死ぬ

死んだら

あたたかい夜のぬくもりの中で

君と僕は

君と僕のいのちを

あたためあう

夜闇のフクロウも

僕達の命だ

フクロウの鳴き声が

静かに僕達の瞳をしめらすことだろう

だいじょうぶだよ

君は必ず死ぬ

死ぬべき君には

もうどのような恐れも無用だ

そして僕達は

時間を忘れた夜明けの

すがすがしい大気を吸い込む

まるで初めて

大気を吸い込んだように

僕達は

夜明けの息吹を感じる事だろう

だいじょうぶだよ

やがて死ぬ時が来る

僕達の宇宙ゲームを終らせて

夢もない眠りに

やすらかに帰る時がくる

初めがないここには

生も死も

初めから夢にすぎなかった

だいじょうぶだよ

君は必ず死ぬ

さあ今 君は君自身に帰る

帰っておいで

君自身である

僕自身の胸の中に

人々は

どういうわけか

死をいみ嫌っていた

だが だいじょうぶだよ

君もやがては死ぬ

死が

君にすべての生命達との

ふれ合いを教えてくれる

だいじょうぶだ

君は死なないのだから

生と死の中をつらぬき

やさしさが

いつも響いていた

(『絶対無の戯れ』より)

恩寵体験者への手紙

恩寵体験者への手紙

※この手紙は、MUGA増刊号44・5号の「恩寵体験者との対話」の対談相手であるTさんへ、対談後に個人的に送ったメールが元になっています。悟りや神秘体験に関して普遍的な問題を含んだ内容であるかもしれないと感じたので、少しばかり加筆・修正して編集し、一般的な形に改稿して掲載させていただくことにしました。

2015年2月27日

Tさま

おはようございます。対談を読み返してみて、ぼくも好きなことを言っていて、Tさんの疑問のかゆいところに触れていないような気もしてきました。ぼくの言葉が新たな迷いの種になってはいけないので、思ったことを少し連ねますね。響いたところだけ受け取ってください。

疑問に思っている自分、恐怖を感じている自分、苦しい、葛藤に満ちた自分というものがどこにあるか？ その苦しみそれ自体が、今のご自身それ自体だと思っていらっしゃるかもしれません。けれども、熟して落ちた柿の実のように、いずれその疑問も地に落ちて世界の一部になるだけだと思います。

恩寵というものは、一つの自我を超えた絶対的な世界体験ですね。それは迷いのある自我に手を差し伸べるように届いた光だからこそ恩寵であり、圧倒的なのです。それはそれで確かに真実です。世界の目に見えぬ豊かさそのものです。

それでは、中核にある自我が石ころと同じだけの価値しか持たぬ、世界の一部だとしたらどうでしょう？

ただ世界があるだけであり、俗がそのまま聖となって、転化するわけです。花は紅、柳は緑というのはそういうことで、あるがままのものはあるがままのものそれ自体として存在することで聖なるものとなる。

ですから、もしもその苦しみを根源的に解消することを切に望むならば（不幸なことに、そこまでの絶望に至ってしまったならば）、恩寵に留まろうとするのではなく、維持しようとするのではなく（それは川の流れや風と同じように過ぎ行くもので維持できるものではありません）、一体化しようとするのではなく、まずはその一体化しようとしている自分というエゴを直視し、

その真実を見極め、認識し、解体してゆく作業が必要になります。つまり、卑小な自我の外にある豊かさを味わうのではなく、卑小な自我そのものを——そのものだけを——問題にしなくてはならないのです。一切の脇目を振ることなく。驚かれるかもしれませんが、むしろ、この自己認識の道においては、恩寵体験それ自体が弊害になってしまうことさえあるのです。

絶望者は、どうしても自分の絶望の正体に正面から向き合わなくてはなりません。それをしなくては本当に心から笑うことも悲しむこともできず、生きていくことができないとしたら、その虚無を産み出すものは何かを探しあて、解決しなくてはなりません。すなわち苦しみの表層から始めて、勇気を持ってもっとも見たくない、自我を成り立たせている中核の正体（それは何か大事なものへの依存心かもしれないし、自己愛かもしれません）を直視せざるを得ません。そしてその葛藤を一つひとつ味わい、理解し、見極め、壊してゆくという地道な作業に取り組むほかないのです。自分の中で、何一つ迷いがなくなり、他人の言葉に惑わされたり、聖なる他者の教えを必要としたりしなくなるまで。自分で自分の問題を独力で解決したとしたら、それが安心立命というものです。その時、求道の道は終わり、創造の時代を告げ知らせる鐘が鳴るのを聞くでしょう。

おそらく、そんなことはとても不可能だと思われるかもしれませんが。誰かの助けがなくては難しいと思うかもしれません。あるいは、様々なメソッドが必要だと思うかもしれません。しかし、自己認識というものは、目の前にある固い、巨大な岩にたった一人で、一つ一つノミを入れていくようなものです。その岩はあなたしか見えないし、触れることができないのです。彫刻家が巨大な石と向き合うように、孤独にそれと対峙しなくてはならないのです。

私は十分に岩を見てきた、と思うかもしれません。とことん苦しんできたのだと。しかし、見てきただけでは足りないのです。苦しむだけでは足りないのです。岩が岩でなくなるまで、ノミを振るい続ける根気が必要です。けれどもその根気の根っこにあるものは、努力でも、欲望でもなく、ただただ絶体絶命という命からがらの苦しみののです。苦しいがゆえに続けざるを得ない——求道者というものは元来、運命から十字架を背負わされた受動的な存在なのです。もしも楽しみや喜びを求めるならば、このようなことはする必要がないのですから。しかし、苦しみの十字架を背負わされた人はどうしてもそれをせざるを得ません。

最初は、その岩の巨大さに途方に暮れるかもしれません。こんなことをしても何も変わらないし、無駄だと思うかもしれません。もう十分に掘ったと思うかもしれません。しかし、その気の遠くなるような作業は遅々として進んでいないように見えて、必ず実を結びます。岩の中核にあるものを探しているうちに——すなわち、それは一つひとつの苦しみの正体を理解し、解きほぐしていくことです——根気よくノミを振るい続けていけば、岩はいずれ崩壊し、崩れ落ちます。あるいは亀裂が入り、一つ二つが石ころとなって転がるかもしれません。それが体感にせよ、ある種の知的理解にせよ、気づきにせよ、その岩が結局のところ、様々な石ころからなる世界の東で

あることを認識できるようになるのです。

悟りへの願望や、日常における様々な恐怖の感情も、寂しさも、嫉妬も、他人の悲しみも、恩寵の体験それ自体も、石ころや、花や、道に落ちた木の実と同じように等価な存在として、隆起する現象として、一断片として、認識することができるようになれば、もはや凡庸な日常の裂け目からきらめく強烈な光としての恩寵ではなく、特殊なメソッドや瞑想による非日常の静謐としてだけではなく、日の光の下でありのままの世界それ自体が救われることになります。

ものみなすべてが地に足がついて落ち着くことで、すべてが仏になり、俗が聖になる。現象というものに固有のものはなく、自分という特別なものもなく、疑問に思う自分と言う中核さえないという認識に至れば（すなわち空になれば——さらに言えば認識さえないので）、もはや苦しむべき自我はなく、世界があります。そう、世界だけがそこにあるのです。そして世界があなたであり、あなたが世界なのです。それが腑に落ちるということです。もはやそこに、特別な「私」は存在しません。

Tさんは自我を超えた圧倒的なリアリティを体験なさった。それはひとつの恩寵であり、転機だったと思います。そして、それに値しない自我というものを徹底的に探求し、苦しんでいらっしゃる。けれども、それは神聖な苦しみなんですね。自我の中核にどんと居座った疑問が肥大化し、爆発しそうで苦しいのです。熟した実が大きくなり、光の世界に向かって皮を破ろうとするがゆえに苦しいのです。しかし、その苦しみを積極的に味わい、十分に育った疑問が熟し切って地に落ちる時、疑問という中核はないのです。そこには何もありません。もはや、苦しい、救われようとするあなたはいないのです。傷つき、恐怖する中心がない。あるのは世界だけです。

花が咲き、蝶が舞っていて、ふくよかな母親が赤子に向かって微笑んでいる——これが禅です。もはや自我を超えた神秘に拘泥する必要も、そこに留まろうと努力する必要もないわけです。

Tさんを恐れさせるどんな巨大な断片もなく、絶対的な、特別な言葉も、存在もなく、ただ等価な断片だけがある——世界がありのままにあるだけなのです。これが認識された時、虚無の海は消えうせ、恐怖はなくなります。なぜなら、自分自身を恐怖させるどんな権威も、力も存在しないことを理解できるからです。そしてまた、恐怖する固有の自我それ自体が本当は存在しないことを理解するからです。ただ、救われた世界だけがあるのです。あるがままの現象世界があり、無数の、穢れなき、裸の断片だけがあるのです。そこから先は、その断片を調和的に統合する、まったく新たな存在としての創造の責務も生まれるわけですが.....

エゴによって苦しまない、最初から聖なる人もいれば、何の疑問もなくこの浮き世で安定した人生を送ればよいという人もいます。様々な人がいて、様々な価値観があり、それはそれでいいのです。この世界は多様性に満ちています。大きな視点で見れば、すべては神の子であり、救わ

れているのかもしれませんが。すべては、愛に値する存在なのかもしれません。最初からそのことを自覚している人もいますし、仕事や宗教、芸術の中にそれを見出す人もいます。

けれども、どんな他人の言葉にも、教えにも、価値観にも決して救われないタイプの人があります。そうした人は、独力で発見するしかないのです。彼は、人気のない、怪しげな小路にいつの間にか入り込んでしまいます。その暗い小路では、どんな価値観も、どんな言葉も、どんな説教も、光も届きません。仮に届いても、その人を救いません。しかし、その孤独な道を引き返すのではなく、慰安に満ちた脇道の誘惑に留まることなく、ごまかすことなく、一人、黙々と足元を確かめながら歩いていけば必ず腑に落ちる地平に辿り着くことができると思います。その地平に立った時、人はこれまでと同じものを見ながらまったく新たな世界を発見し、一つ「然り」と肯いた後、胸を張って堂々と、大通りに戻ることができるのです。あるいは、前人未到の道を行くこともできましょう。

これらはいずれも単なる言葉であり、イメージなので、この言葉もまた権威づけることなく、迷いの種とすることなく、響いたところだけ受け取ってください。切り捨ててもらってもけっこうです。少し、説明しすぎているところも、定型句であるようにも感じています。どちらにしろ、言葉は言葉にすぎず、真実そのものではありません。そもそも今、我々が問題にしていることは、言葉で指し示せる類のものでもないのですから。

対談については、匿名とはいえ公になることに抵抗を感じる箇所もあるかもしれません。けれども、MUGAの読者はTさんと同じように既存のスピリチュアルに疑問を持ち、真実を探求している人も多数いると思います。迷っている方もいるでしょう。そういう人々にとって、我々のやり取りは大きな気づきの種になることと思います。私自身も少しばかり大胆なこと（対談原稿を読み返せばわかると思いますが）を言っているわけですから、一つのチャレンジなわけですね。もちろん、納得いく形で赤を入れてくださればと思いますが、少し長いものの、全体としてたいへんに意味のある表現になっていると感じたことをお伝えしておきます。

それでは校正原稿お待ちしております。よろしく申し上げます。

那智

麻雀で85%負けない方法

麻雀で85%負けない方法

最近、少し暇になったので（フリーランスとして暇なのはまずいのだが）、午後になるとフリー雀荘にすることが多い。年始はエネルギーを取られることが多々あって調子が上がらなかったが、2月に入ってからはほとんど負けていない。自分は一応収支をつけているが、だいたい毎年1回は14、5日間連続で勝って帰る時期があり、そういう時は雀荘に行く前から「今日は勝てる」と結果もわかっている。自分の心身の状態、認識の強度、運の状態で勝てるとわかるのである。

場代を払った上でそれなりに自信のある相手（知らない相手と金を賭ける者が集まるのだから自信があつて当然だが）と打つので、そうそう簡単に勝てるものではないし、当然、その日の自分の運、席の運、相手関係もある。中には、手ごわい相手もいる。それでも、年トータルで8割以上（だいたい年間で一日単位の勝率は80~85%である。）浮いて帰ることができるのは、今はある「原理」のようなものを理解して少しばかり身につけているからであり、その「原理」の感得のために麻雀を続けてきたと思う。その延長に自分の場合、「悟り系」やらなにやらがあつた。あくまで、実践で使えなくては、観念であり、机上の空論だと思つてやつてきたからだ。

最近、負けない原理がより明晰になってきたのでここに書き留めておこうと思う。別段、自慢とかそういうわけではなく、気づきを確かなものにするためでもなく、この原理は汎用性があり、誰にでも、どんな場においても使えるものだと感じるからである。何も麻雀のみならず、対人関係においても、表現行為においても、精神的な安心立命においても共通して使える原理であり、本メルマガの「無我表現」に通じるエッセンスを秘めていると感じる。

それではその「原理」とは何かというと、瞬間、瞬間の表現行為においては、「受け」（あるがまま）が土台になっていなくてはならない、ということである。

麻雀や武道において「受け」とは何かというと、「守り」のことではない。「受け」とは、防御や逃避ではなく、あくまで、次に「攻撃」に移る体勢を崩さないためのガードのことである。バランスを崩しても逃げ惑うように守るのでは、次のパンチを繰り出す体勢が取れない。

“雀鬼”こと裏麻雀の超一流であつた桜井章一氏が提唱する雀鬼流では、「攻撃8割」「受け2割」で流れを作ることを教えているが、何も闇雲に攻撃しているのではなく、「受け」が土台になつた攻撃8割を指しているのだと思う。実は、ご祝儀が乱れ飛ぶフリー雀荘では「攻撃9割」ぐらいの人はたくさんいる。引いてばかりいては祝儀負けしてしまうからだ。しかし、そういう人たちはいい時はいいが、崩れた時にどうしようもないほど負ける。彼らの攻撃は「欲望」の攻撃

であり、全体感を無視したいちかばちかの賭博なのだ。

要は、自分の手の形だけで押している人が多い。そういう攻撃は相手ありきではなく、まず自分主体であり、全体の調和、流れと関係ない自己中心的行為である。自我を満足させるために打っているのは、はまれば気持ちよいが、そうでないと心が乱れる。逆に「打たれるのが怖い」から逃げるような打ち方をしている人も多いが、これも自我の恐怖（未来のことを不安にイメージする思考）から来る行為であり、こちらは何の怖さもない。「守り」と「受け」は違うのだ。

麻雀において「受け」というのは、具体的に言うと、瞬間、瞬間、場の全体を見ながら、相手にとって必要な牌をぎりぎり間に合うように先に切ることを意味する。つまり、全体を俯瞰して見ながら、瞬間、瞬間、一打一打に意味を持たせることであり、その意味が流れを作る。一回、一回の結果や、機械によって配られる牌パイの良し悪しではなく、相手にとって嫌な牌をぎりぎり切り出す作業を続けるプロセス——すなわち手順こそが大事なのである（もちろん、危険な牌を切らないで我慢するのも手順の一つである）。

相手に嫌なことをするのが正しいのかと思うかもしれないが、勝負事というのは麻雀に限らずそういうもので、野球のピッチャーだって相手の嫌なコースを突き続けて試合の流れを作るし、サッカーも相手チームのディフェンスが手薄なところを徹底的に攻める。別段、嫌がらせを好んでいるわけではなく、要は、こうした対人競技というのは、どちらが全体感があり、調和的行為ができていくかという力比べのようなものなのだ。

さて、そうやって体勢が整った状態で押していく攻撃は圧力があり、受けもできているので強い。自分の手格好だけ見て打つのは楽だし、はまれば気持ちもよいが、そういう攻撃は隙が多く、カウンターを食らいやすい。それでは、とにかくパンチを振り回して打ち合う4回戦ボーイのようなものだ。当たればいいが、空振りすれば致命的な打たれ方をしてしまう。そして、肉体的にも精神的にも打たれたダメージが残るとバランスを崩し、ますます乱れた攻撃になる。こうなると、もうその日の修正は難しい。場合によっては、何日も引きずることもある。自分はボクシングマニアでジムに通っていたこともあるが、超一流のボクサーはいずれも「受け」の達人であり、バランスを崩さないものだ。攻撃は本能的なものであり、誰にでもできるが、「受け」は修練を必要とする。

「受け」を土台にして「攻撃」し、流れを作る——これが今現在の、自分の負けない麻雀の方法論である。それができている日は、最後にひと伸びするし、大ダメージを食らうこともない。仮に前半運がなくても、後半で流れを持ってくることができる。「受け」に手一杯で、運の細かい、降りることばかりを余儀なくされるどうしようもない日もたまにあるが、そういう日はチャラか少しの負けで上出来として早めに切り上げればいい。

本当に、どうにもならない時というのがある。勝負に絶対というのではないし、心身の状態が整っていない日もある。調子が上がる前に用事で出かけなくてはならないこともあるし、また、これが一番多いのだが、勝ち始めると相手が逃げるように止めて、卓割れしてしまうこともある（こればかりはどうしようもない）。そして、別の卓に移って一から流れを作らなくてはならないはめになるのだ。あるいは、絶好調の相手にぶつかって、しばらくは何もできないこともあるし、不用意に役満を打ってしまうようなアクシデントもある。運気に任せて力強い攻撃をしてくる相手もいる。しかし、今、自分の置かれた状況、運の状態で何をすべきか明晰に知っていることが心の揺れを少なくするのである。

迷いのなさは、打牌の乱れをなくし、相手に圧力を与える。内的葛藤が丸見えで、迷い迷い打っている人がいるが、そういう人はどこを突けば崩れるのかわかっているので怖さがない。麻雀を打っていると、そういうのは全部見えてしまう。

直接的に欲望や恐怖といった自我を刺激される勝負事の場合は、個我を超えた、全体性（あるがまま）を無視した自己中心的な行為に人は陥りがちなものである。普段、社会的仮面の下に隠された本性がむき出しになる。日頃、隠された弱さ、ずる賢さ、内的偽善、ごまかしというのが、鉄火場である非日常の場で顕わになるのだ。礼儀正しくても、内部に激しい怒りや葛藤を抱えている人を見かけるが、そういう相手は嫌なことがあった時に突然、怒り出したりする。打っていて怖い相手というのは、内的葛藤が見えない相手、内部が柔らかい相手である。こういう相手は崩れにくく、弱点が少ないので攻めにくい。

麻雀とは関係ないが、内的な葛藤、プライド、固い核が残っている人は、いかに良いことを言っても、善行をなしていても、礼儀正しくても、自我の強い人である。逆に自我の薄い人、自我を低い、正しい位置に置いている人は、何か特別なことをしていなくても、口の利き方がぞんざいでも、基本的に愛のある人である。自分は元々自我が強かったので、悟りだの何だのを求めなくてはならなかったが、最初から自我の薄い、あるいは自我を低い位置に置いたすばらしい人は、そういうものは一切必要がないと思うし、実際、現実生活の中で、この人にはかなわない、という人を幾人も見てきた。

さて、非日常である勝負の場で、全体感を持って行為するためには、自己中心性の源である自我の葛藤を見つめ、落としてフラットにし、自分も他者も、等しく「見る」ことが必要になる。そのためにこそ、日常で自我の葛藤を見つめ、落としておく必要があるのである。別段、そのような修行めいた行為をしなくとも、自分の悩みや迷いが無い日は、人は全体感を持って場が見えるものだし、勝負事も強いものだ。例えば、仕事や恋愛が上手くいっていたり、日常生活が順調で悩みが無い人ほど強運なのは、自我に捕らわれて煩悶するウェイトが少ないため、全体がよく見え、気づきの量が増えるのである。こうして、強運な人は、どんどん強運になる。悩みが多く、不運な人は、どんどん不運になる。金銭的に余裕のある人が、追い詰められた人より勝負事が

強いのは、恐怖が少ないためでもある。恐怖とは、すなわち「自我」である。

もちろん、我々の求める道は社会的成功を収めるとか、強運になるとか、欲しいものをどんどん引き寄せるとか、余裕のある大人になるとか、そういう俗世間の積み上げる道ではない。むしろ、そういった余分なものを落として何ものでもない、「空」につながる道であり、よりストイックで、精神的で、絶対的なものに到達する道である。

それではどうすればいいのか？

どんな相手にも、どんな場においても、全体性を持って乗り越える行為をなすためには、迷いや、悩みや、勘違い、自己中心性を見つめ、理解し、消化しておくことが一番大事になってくる。つまり、いついかなる瞬間も、自分の自我を容赦なく見つめ続ける動的瞑想こそが、自分というものを知る最短の道なのである。それはすなわち自己浄化の道であり、「空」につながる道である。

「空」とは、特殊なマントラや瞑想によって自我を遮断し、人工的にその中に逃げ込む道ではなく、むしろ、「空」に入るのを邪魔する自我を徹底的に見つめ、浄化した後に現れる何ものかである。つまり、現在のスピリチュアルな世界で提唱されている方法のほとんどは、道筋が逆なのだ（もちろん、念仏やマントラの効果を否定するものではないし、何事も徹底すれば突き抜けることはできるのかもしれないが）。

先に人工的な「空」を味わって自我を忘れ去るのではなく、自我を直視することが肝要である。ゴミで埋もれた部屋にいて、ゴミのない場所を見つめて瞑想したところで、問題は何も解決しない。インスタントな「空」は所詮インスタントであり、常に自我が危険にさらされ、刺激される勝負の場では吹けば飛ぶような効果しか得ることはないだろう。むしろ、自我はほったらかしで、自分は「空」を得たなどと自己欺瞞に陥るのが落ちである。それは慰安や自己肯定にはなるかもしれないが、人としての強さにはつながらないのだ。もちろん、勝負の場で通用するようなものではない（勝負事は、結果が真実を示してくれるのでありがたい）。むしろ、なぜ「空」に入ることに憧れるのか、なぜマスターやグルの元にはせ参じるのか、という自分の依存的な自我を見つめることが真の瞑想であると言える。

恐ろしくても、嫌でも、見たくなくても、醜く、葛藤に満ちた自我を見つめる困難で誠実な道のみが、最終的には安心立命につながる。つまり、この方法においてはグルも指導者も、経典も必要がない。見るべきものは、常に自分の最短距離にあるからであり、人はそれを見るだけだからだ。しかし、多くの人はその見ようとせず（むしろ、そこだけは見ないようにしているようだ）、美しい言葉や最もらしい理論、理想の中に逃避する。

ある時、自我の葛藤、突起物、ゆがみを見つめることによって、激しい自己浄化（これは長い、孤独で地道な自己凝視の道のりの末にもたらされる）が起こるかもしれない。いわば、自我という障害物が崩れ、パイプの中を落ちて行って、消えてしまうのを体験することだろう。そのエネルギーは、天上から下方（足の下）に抜けるエネルギーである。エネルギーがそれを溶かすというよりも、自己凝視により、それが自らの中に本質的に根付くものではなく、世界のゆがみの一つにすぎないと認識できた時、固い自我の固形物が顆粒のように崩れ落ちるのである。パイプ詰まりがなくなるようにきれいになった時、水道が流れるように上からエネルギーが流れてきて、浄化してしまう。

葛藤、迷いが無い、すっきりした状態でいれば、「あるがまま」というフラットな土台の上の中央にバランスよく立つことができるだろう。その大地の上にしつかりと立った垂直的姿勢から混沌を調和させ、形にする「ある上昇的エネルギー」が生じる。それは下方からやって来て、天上に流れるエネルギーである。それが地上の事物を通り過ぎる時、ディニユソスの混沌をアポロ的明晰さへ変容させる力となるのである。悩み、葛藤がある状態では、その創造的エネルギーは内部でロスされ、やって来ないのだ。

すなわち、自分の身体感覚だと浄化のエネルギーは天上から大地へ、創造のエネルギーは大地から天上へと事物を透過して流れる。この浄化のエネルギーは他力的であり、創造のエネルギーはどちらかと言えば自力的である。しかし、どちらも自我の外からやって来るものである。自我を超えた状態にあると、この途方もないエネルギーを感じ取ることができるようになり、その力を使うこともできるようになるだろう。

エネルギーというと神秘的な物言いになるが、それは体感できることであり、決して主観的なもの、すなわち観念に留まらないのが特徴である。時に、病気を治したり（私は慢性病が快癒してしまった）、新たな人間関係や仕事をもたらす等、運命を変容させたり、勝負事を勝たせたり、対人関係に強くなったり、何か芸術作品を作る力にもなる、現実的な力のことである。しかし、そうしたエネルギーを最初に求める修行というのは明らかに間違っていて、それらは自我という巨大な置物を脇にどけるなり、破壊するなりした後にやって来る恩寵である。エネルギー先にありきだと、この自我とエネルギーが一体化して、非常に恐ろしいことになりかねない（オウム真理教の教祖がその典型であるだろう）。

要は、自我の置きどころがすべてなのであって、まずは自己中心的な自我を直視することに終始すればいい（見たくないかもしれないが、真に絶望した人間はそれをやることができるだろう。なぜなら、絶望の正体を見極めなくては救われないからだ）。こうして、初めて余裕のある相手や、尊敬する相手、社会的肩書きのあるような相手とも互角に渡り合うことができ、時に、それら俗世の価値に重きを置く人々を超越する力を持つことができる。

もしも自我を超越した力に触れることができるならば、それは単に安らぎやハーモニーを生み出すのみならず、ある種の全能感や、現実を変容させる力を持つことが実感されるはずである。その時、人は世間的な意味において幸福になるのではなく、誤解を恐れずに言えば、超人的になるのである。超人とは俗世の物語的葛藤から自由になることであるが、「物語」とはすなわち「時間」であり、ここで初めて時間性を超越した全能感が感得されることになる。全能感とは自由であり、創造的力に満たされた感覚である。

もちろん、そうした力の陶酔からさえ自由になることを仏教は説いているのかもしれないが、まずは力に触れてみなくてはそれこそ絵に描いた餅であり、理想論であるにすぎないだろう。私自身の課題としては、勝った後の振舞い方がある。例えば、こうした原理を土台にして勝利を得た後は、どこか鼻につくような高慢さが出てしまいがちなものである。しかし、人を不快にさせてはしようもない、おごり高ぶるようではしようもない。弱者を見下すようではしようもない。力に酔って、強さを誇示しても人は寄り付いてこないし、誰も遊んではくれない。だからこそ力への執着からも逃れることが必要になる。力やエネルギーを放棄するのではなく、それらからも自由になることである。しかし、これもまた一つ一つ、人間関係の中で克服しなければならない課題であるに違いない。我々は、いついかなる時でも未熟なのだ。

ちっぽけな自分があるがままに見つめること——そこから先に、小さな自分を越えた豊穡なるエネルギーの地平がある。その力は、「自我」の捕らわれから解放される限りにおいて、誰にでも触れることができるものである。そのエネルギー表現（無我表現）の象徴として真に優れた芸術家や、トップアスリートがいるのだが、それは葛藤とストレス多き俗世間に生きる、我々にとっても、決して無縁な世界ではないのである。むしろ、葛藤多き、混沌で、複雑で、困難な人生の中でこそ、最短距離でそのエネルギーの世界に入ることが可能になると言ってもよいだろう。

我々は、常に学ぶチャンスに恵まれている。どんな苦しい境遇においても。どんな虐げられた、誰にも理解されないような孤独な運命の中においても。

異端が普遍になる時 ——例外者たちの声に耳を澄ませて——

気づけば、ぼくの周りにはどういうわけか、少し不思議な人たちが近寄って来ることがある。彼らの言葉はあまりにも独自の構造を持っていて、時に非論理的であり、日常的な思考法では理解できなかつたりする。こうした人々は大抵、社会の端の方で目立たないように息を潜めて生きており、時に、薄暗がりから顔を出して誰かに見つけてもらえないかと辺りを見回していることもあるが、すぐにおびえた様子で首を引っ込めてしまう。

ぼくは彼らのことを親愛の情を持って、「例外者」と名づけている。そしてどういうわけか、例外者は例外者を見分けることができ、お互いに何となく見守っているのだが、それぞれが他の国に住んでいる人のように独自の宇宙を持っているために共通の言語が見つからない。なんと声をかけてよいかわからないでいたり、あるいは自己充足していたり、ちらりと確認するだけして、歩き去つたりする。彼らの行動はあまりにこの定型の記号、観念に満ちた現象世界に非執着であるがゆえに、非合理で、まったく先が読めないのである。

例外者は自我によって構成されたこの世の価値観、社会的記号を信じられない人々である。ゆえに彼らはこの世界の中に自分の居場所を見つけることができず、必ずといっていいほど誰も使っていない廃屋や舞台裏、暗がりには追いやられ、一人、奇妙な法則を守って暮らしている。この秘密の法則を遵守すればするほど、彼らはますます独自になり、ますます孤独になってゆき、ますます人間離れた運命の中に入り込んでゆかざるをえない。

社会的な共通語を持たない彼らがどうやってお互いを見分け、あるいは僅かでも交流をすることができるかという、それは「響き」である。あるいは、匂いのようなものかもしれない。独自の存在形式から生まれる響きや匂いがある、それが遠くからでも伝わることもあるのだ。だからこそ記号的言語を超えて、彼らは僅かでも共通の何かを分かち合うことができるのである。そしてごく稀にだが交流することもあるし、共に歩くこともあるし、もちろん、何ごともなかったかのようにお互いに執着せず、離れ離れになることもある。そして、それぞれ、自分だけの手作業に没頭して、顔も上げなかつたりする。けれどもその何年もかけて作り上げたものを、誰にも見せずに机の中に眠らせてしまうこともざらなのだ。なぜなら、彼らはあまりにも自分が理解されないことに慣れ過ぎているからだし、時によると諦めているからである。

通り雨が空を飲み込み、

時計のことを忘れさせる。

今日の天気は、お待ちなさい。

雨上がりのアスファルトの匂いがすき。

どこまでも続く坂の上

とげの刺さった手紙を見つけました。

太陽が、割れた化石を飲み込み

静かな冬が、時計のように続きます。

飲み込まれた化石が消化されるころ

にぎやかな春がそっと訪れる。

※紹介した詩については、許可を得たうえで掲載させていただきました。

別に、本稿では特殊な表現をしている者や、存在形式を持つ者の中にある種の特権性や、特別な美点を認めているわけではない。アウトサイダーの中にのみ真実があると言いたいわけでもない。ただ、こうした誰の目にも止まらない、社会から理解され難い運命を生きる例外者たちの宇宙の中にこそ、我々が忘れてしまった大事なものが眠っていて、それが日の光に当たった時に、世界全体を表現する「美」として感じられることがあるのではないか。その薄暗がりの中に眠っていた「美」こそがこの世界を覆す新たな愛の形なのではないか、と夢想することがあるのである。例えば、カフカのように。例えば、リルケのように。

ただ、偉大な、――途方もなく偉大な世界がある。一切は許され、愛されているのかもしれない。しかし、その非個人的な事実を意味のある真実として一瞬でも形にすることこそが、一人の人間の主体的役割であるという逆説こそが創造の秘密だとしたらどうだろう？ 全体を一にするもの。一を全体にするもの――ここにきてようやく、芸術と宗教が一つになる可能性を秘めてくる。

真実と美は、定型のメッセージの中にあるのではなく、観念の中にあるのではなく、現象それ自体の中にあるのでもない。その現象が通過した一人の人間という独自の存在の中から、個性的な形で現れ出てくる。より正確に言えば、一切の地上的断片に捉われることなく、それを乗り越え、統合した一人の人間の独自の存在形式の中からこそ、新たな愛の形がこの大地に顕現する

のだ。そう、二千年前のあの人がそうであったように。

異端が普遍になる時——それはこの世界に創造が起きたことを意味する。そしてその暗がりから起こった創造は、決して誰の目にも止まることなく、認められず、愛されずに消えていった者たちが住んでいる僻地や穴倉をも包含しているがゆえに、一瞬にしてこの世界全体を統合し、未だかつてない意味を与える。その光と闇を統合した何ものかが現れる瞬間の中にこそ、生きとし生けるものたちの救済の可能性があるのである。絶対に光が届かなかった場所にさえ、僅かに微細な光が届く奇跡が生じるのである。その光は強烈ではなく、微細であるがゆえに届くのだ。悲しみと沈黙を宿しているがゆえに、孤独な瞑想者の夜の奇妙な夢の中にも入り込むことができる。そして暗闇の中に浸透し、ひっそりと、優しく、虐げられた者たちを包み込んで、共に眠ることもできるだろう——そんな沈黙を宿した光。

「遠野物語」と「新約聖書」に見る裸の神の表現

「遠野物語」と「新約聖書」に見る裸の神の表現

「国内の山村にして遠野よりさらに深き所にはまた無数の山神山人の伝説あるべし。願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ。この書のごときは陳勝呉広（ちんしょうごこう）のみ」

有名な、「遠野物語」の冒頭の中の一文である。「平地人を戦慄せしめよ」このフレーズは一度聞いたら忘れられないが、そこには柳田国男のこの民俗学の源流にもなった不思議な書物への絶対的自信、信頼を感じることができる。

最近、ふとしたきっかけから「遠野物語」を読み直し、文字通り戦慄を覚えてしまった。とは言っても、これまで気づかなかった、この説話の表現形式それ自体の完璧さに、驚き打たれたのだ。

「遠野物語」は実にシンプルな形式を持った文学作品である。そこにあるのは、岩手の山の奥にいた山人たちの怪しげだが、シンプルな息遣いであり、それに会った朴訥な人々のこれまたシンプルな驚きが記されているだけであった。つまり、いつ、誰々がこういう奇怪なものを見て、驚いて逃げた、とか、打ち殺した、とか、病で死んでしまった、とか、事実のみが提示され、ピリオドが打たれている。ある男が、幽霊を見て、驚いて、三日後に死んだ。それ以上のものは何も書き記されていないのだ。

何の主観的説明もないし、観念も入り込まない。事実のみが提示される（柳田の手により事実が編集された問題はまったく別である。ここで重要なのは文学形式の簡素さそのものなのだ）。それでいて、この物語の豊かさ、深さはどこからやってくるのか。素材の豊かさや、柳田の文語体を自由に操る文才もありこそすれ、そこにあるのは裸にされた事実のみである。にもかかわらず、恐ろしい深さを宿した文学になっている。その形式の簡素さと完璧な効果に、私は驚愕したのである。日本にも、こんなに優れた文学があったのか、と。

「裸の事実」だけを記し、一切の説明、解釈を捨て去ることで、我々はその不合理で不可解な物語の隙間から漂ってくるものに戦慄する。埋められなかった行間から、昔々の、異世界の暗闇が匂いたち、ゆらめき上がるのを肌で感じる。その時、我々は現代社会にいながら、一歩だけ、遠野物語の世界に足を踏み込んでいる。我々は、事実そのものではなく、その事実と事実の間にある、ほの暗い隙間に吸い寄せられる。そして、恐ろしい山人や、天狗や、山姥に囲まれていることに気づき、恍惚とした気分になる。例えば、こんな具合である。

「白望（しろみ）の山続きに離森というところあり。その小字に長者屋敷というは、全く無人の

境なり。ここに行きて炭を焼く者ありき。或る夜その小屋の垂菰（たれこも）をかかげて、内を窺う者を見たり。髪を長く二つに分けて垂れたる女なり。このあたりにても深夜に女の叫び声を聞くことは珍しからず」

我々は、これと同じ効果を持つ作品をいくつか思い浮かべることができる。説話形式の前身たる今昔物語集はさておき、例えば、紀元前のローマの退廃の生活を描いたフェリーニのカルト映画「サテリコン」や、様々な伝説、そして聖書である。とりわけ新約聖書は、イエス・キリストが起こした奇跡の事実を淡々と述べているだけのように感じるが、西洋文化・芸術の基礎として、爆発的なエネルギーを秘めた物語となっていることは言うまでもない。

イエス・キリストという受肉化した神が、この地上に光臨した。その神の子は、生きた、肉体を持つ、一人の男であり、具体的な身振りを持ち、人にこうやって話しかけ、病を治し、死人を生き返らせ、罪もないのに十字架にかけられて死に、三日後に復活した。これだけの事実が、どんな神聖な言葉や観念、神学的体系、深遠な哲学よりも、人々の魂を震えさせたのである。なぜなら、それは手に取れない曖昧なものではなく、とにもかくにも「事実」として記されていたからである。

柳田国男は、日露戦争の勝利で日本が高揚し、近代化に向けて突っ走る中で、忘れ去られた日本の闇の世界、つまり山に隠れて住んでいた山人と呼ばれる存在や、遠野の古き神々、妖怪、幽霊を救い出し、我々の前に列挙する。これが日本と言うものではないですか、こうした異界の者たちとの交流こそが、私たちの世界を豊かにし、意味あるものにしていただけではないですか、私たちはもっとも大事なものを忘れていないですか、と迫る。しかし、彼の様々な論文はさておき、この「遠野物語」ではただただ事実が語られるのみであり、そこには一切の主張も、メッセージも、解釈も、含まれていない。何一つ、彼は自分の言葉では訴えない。この物語の武器は、唯一「事実」である。

しかし、事実とは何だろう？ 実際にあったとされていることだろうか？

こうした説話的文学において、物語作者が「事実」として読者に提示するものは、実は、彼が最も大事だとしているものである。すなわち、彼は一切の主観を排して——いわば無我的な眼差しによって観念の贅肉や、くだらぬものを消し去り、浄化して——それでもなお残るものを提示する。まるで、この観念という不浄な液体で汚染された世界から、その液体のみを吸い上げ、真空にすることで裸の姿を復活させるように。そしてその真空世界に残った事実だけを提示すれば、彼が言いたいことのすべてがあり、いや、それ以上のものがある。彼はそれを知っている。それが優れた説話文学作者に共通する秘密である。つまり、作者は、「事実」として、彼の「神」を提示するのだ。

新約聖書の作者は、イエス・キリストという神の子を「事実」として書き記し、それだけで事足りることを知っている。なぜなら、肉体を持ったイエスこそが、この地上における神のあらわれそのものであり、余計な解釈は一切必要ないからだ。神学は、単なる後付にすぎない。ここにおいて、神はひとつの事実であり、事実は真実そのものである。しかし、その事実（すなわち神）に触れた人々の驚きや、憎しみ、裏切りもまた、神に出会った人々の裸の事実として書き記される。たった一つの事実を通して、つまり神の受肉化というありえない事実に対して、人々は常識を剥ぎ取られ、あるがままの、裸の人間として関係せざるを得ない。そして、そこに新たな事実が生まれ、波紋となって広がってゆく。

信じる者、奇跡を祈る者、軽蔑する者、嫉妬する者、裏切る者——あるがままを照らし出す光によって、これまでの安逸な日常性は破られ、新たな事実がバリエーションとして現れてくる。つまり、イエスであり、ペテロであり、マグダラの MARIA であり、パリサイ人であり、ヘドロであり、ユダである。こうして、一つのあるがままの事実を前にして、あるがままの事実で対応せざるを得なくなった人々の関係性の中から神話が生まれる。

「遠野物語」では、山人たちは、当時の柳田にとって最も重要な「神」であった。いわば、日本本来の神であり、彼はその事実の強力な力を信じることによって、この説話文学を成立させてしまったのである。民俗学の原典となった学術書という見方はさておくとして、これは一つの信仰の書であることに違いない。山人の伝説を事実として捉え、淡々と書き記すことによって、彼は日本の淵に眠っていた神話を掘り起こしたのである。

我々は今、信じるに値する神（事実）を持っているだろうか？ この事実だけを記せば、自分にとって最も重要なものすべてが表現されているのだ、という、神聖なものを持っているだろうか？ もはや、山人たちはどこかに行ってしまった。宗教の神話は崩れ去った。一神教は、世界を分裂させた。ありとあらゆるイデオロギー、哲学、観念は幻想であった。我々は今、具体的な事実を求めている。事実の中に、この混沌とした世界を打ち砕き、生きるに値する新たな神を求めている。新たな光を求めている。

その事実は天から降ってくるのでも、山の中にいるのでもなく、今、あなたの目の前に存在しているのかもしれない。我々はただ、眼を見開けばよいだけなのだ。しかし、それが美しいものであれ、俗悪なものであれ、聖なるものであれ何であれ、様々な情報を次から次へと浴びせられ、曇った我々の瞳は、目の前の存在の中にある「裸の神」を見ることができなくなってしまった。手に取れる事実を失ったのではなく、それを見る目と、感じる手をなくしてしまったのだ。それゆえに我々は事実を離れ、観念世界に神と救いを構築せざるを得ない。ここに現代の悲劇のすべてがあるのである。

※参考書籍

「遠野物語 山の人生」柳田国男著（岩波文庫）

「聖書」（日本聖書協会）

ロダンの創造に見る新たな時代の芸術

ロダンの創造に見る新たな時代の芸術

「ロダンは名声を得る前、孤独だった。だがやがておとずれた名声は、彼をいっそう孤独にした」

この一説から始まる詩人ライナー・マリア・リルケの評論「ロダン」は、「考える人」等で有名な彫刻家ロダンの秘書を務めた彼が、天才の仕事ぶりを間近で観察しながら書き記した稀有な作品である。この評論それ自体がロダンの芸術的法則を文章化した芸術作品であり、ロダンの彫刻それ自体に劣らぬ「事物」表現にまで高められている。

リルケの書くものは詩のみならず、小説から評論、個人的な書簡まで、すべて彼自身の内的原理によって形式化され、もはや彼の手に触れたもの、目で見えたもの、聞いたものすべてが独自の詩の原理に貫かれているようである。実際、リルケは個人ではなく、詩人として、芸術家として生きた。彼は、道を歩いていてもリルケであり、一人でいても、誰かと話していても、固有のリズム、固有の法則、固有の形式を表現した。道を歩く詩人を見て、「あっリルケだ」と誰かが言ったとか、言わないとか。彼はそういう人だった。存在形式それ自体が芸術であり、芸術は、日々の生活における徹底した観察の積み重ねの結晶であった。

「彼は詩人であって、曖昧なものが嫌いであった」と語ったリルケ。

しかし、こうした芸術的作法、法則の根底にあるものを彼はロダンから学んだのであった。このロダン論は一人の偉大な彫刻家の評伝という範囲を超えてしまっている。これはリルケ自身の芸術論であると同時に、「未来の芸術のあるべき姿」として、「我」という観念的存在を超えた、とある神秘的法則を見ることができる。

それではリルケがこの彫刻家から何を学んだだろうか？ 実を言えば、彼はロダンの仕事の中から、感傷や思想ではなく、絶対的で、自然の創造と同じような確固たる「事物」を創造することを学んだのである。つまり、そこにあるのは裸の、「あるがまま」の事物を作り出す手仕事、ただそれだけであり、創造の独自性や思想といったものではなかった。彼自身の言葉の引用によって、それを見ていこう。

「どういう物を作ろうとするのでしょうか。美しい物をでしようか、いいえ、そうではありません。誰が一体美とは何であるかを知っていたでしよう。似た物を作ろうとしたのです。一つの物をです。その中に自分らの愛しているものが、また恐れているものが、またそのすべての中にある理解しがたい或るものが再現されているのを見る、そういう一つの物を欲したのでありました

」 (『ロダン』リルケ著 高安国世訳 (岩波文庫) p82)

「美を捉えるものだと思っていた美学的見解の存在が皆さんを迷わせて来たのです。また美を作ることを自分の務めだと心得るような芸術家を生み出したのです。それで、美を「作る」ことはできない、とくりかえしここに述べることはやはりまだむだではないのです。誰もまだ美を作った者はありません」 p83

「ところで或る創作者がこういう認識に達すると、これがどんなにすべてを変えてしまわずにはおかぬかを御想像ください。こういう認識にみちびかれる芸術家は、美について考えるという必要はないのです。美がどこに成り立つかというようなことは、ほかの人同様ほとんど知らないのです。ただ、自分を凌駕する有用な品々を作り出そうという衝動にみちびかれて、彼は自分の作るものに美がおそらく来てくれるであろうようななんらかの条件の存在を知っているばかりです。そして彼の使命は、この条件を熟知することであり、この条件を作り出す能力をやしなうことにほかならないのです」 (同p83)

ここには、恣意的でオリジナルな美的創造という我々が芸術家に抱きがちなロマンティックなイメージはかけらも存在しないことは何となく感じられるだろう。バラの棘に刺され、白血病になって死んだかよわき、少女趣味の、ロマンティックな詩人の相貌はここにはどこにもない。あるのは一つの宇宙的法則にのっとりた自然の営みと芸術を結びつける地に足の着いた確固とした見解、及び純粋な信仰にも似た力強さである。彼はこの確実な道をロダンから学んだのであった。

「なぜかといえば、かつて心をふるわせたすべての幸福、考えるだけでも私たちにほとんど破壊しそうになるすべての偉大さ、ひとを変化させずにはおかぬ広大な思想の一つ——そういうものが、ふと唇をすぼめることや、眉をあげることにほかならなかつたり、額の上のかげった部分にほかならなかつた瞬間があつたのです」 (同p85)

「あるのは種々さまざまに動かされ変化されたただ一つの表面にすぎないのです。この思想の中に、ひとは一瞬全世界を考えることができました。すると全世界は単純となり。この思想を思っている人の手の中に課題として置かれました。なぜなら、何物かが一つの生命となり得るか否かは、けっして偉大な理念によるものではなく、ひとがそういう理念から一つの手仕事を、日常的な或るものを、ひとのところでとどまる或るものを作るか否かにかかっているのです」 (同p85)

リルケは、ロダンのただただ「事物」を信仰し、独自の形を作り出そうとする着実な営みに新たな時代を切り開く芸術のあり方を見た。彼は——天使が舞い降りたような、あれほど靈感に満ちた詩を書いた彼は——インスピレーションやひらめきによるのではなく、この日常の中の観察

とたゆみのない手仕事というロダンの芸術的手法（というよりも、人生のあり方それ自体の法則）に偉大さを見た。ロダンの中では、インスピレーションは天から降ってくるものではなく、「事物」そのものの中に発見されるものであった。つまり、彼はそれほどまでに仕事と一体化して生きていたので、インスピレーションそれ自体が生活となり、手仕事の一環となっていたのである。神は、観察と手仕事の中に宿る。ここに偶然性は存在しない。彼は手に触れる事物の中に神を見出していたのであった。そして、その迷いなき仕事を通して、彼は新たな創造者となった。一切の批評や批判は、もはや彼の作品に届かぬほどに、彼は確固とした「物」を作り続けた。

しかし、この自ら作品によって以外、語ろうとしない彫刻家の情熱の奥底にあるものは何だったのだろうか？ 彼は何ゆえに事物を信頼し、新たな事物を生み出すこと、世界の結晶たるオリジナルの事物を作ることのみかくまで純粹になれたのだろうか？ ロダンの仕事を間近で観察し続けたリルケはその秘密をこのように語る。

「一種の手仕事が成立するのです。しかしこれは不死の運命を持つ者のための手仕事と思われるほど、そんなに遠大なものです、見きわめもつかず終わりもなく、「たえずまなぶ」ことを目あてとしているのです。ではこのような手仕事にふさわしい忍耐というものはどこにあったでしょうか。

それはこの労作者の中の愛にありました。それはたえずこの愛の中からあらたによみがえって来ました。なぜなら、何物もそれに抵抗することのできぬ「愛する人」であったこと、これがおそらくこの巨匠の秘密なのです。彼の求め方はながく、熱情的で、たえまがありませんでしたから、すべての物は彼に許したのでした。それは自然の事物のみではなく、その中で人間的なものが自然になりたいとあこがれているあらゆる時代のすべての謎めいた事物もそうでした」（同p89）

「この「よく作ること」、このもつとも曇りない良心をもって働くこと、これがすべてなのでした。一つの物の形を写し取ること、それはこういうことでした、どの部分ものこりなく行きめぐったこと、何事をも黙殺せず、何事を見過せず、どこにおいても偽らなかつたこと、そして百とあるすべてのプロフィールを、すべての仰視やすべての俯瞰を、すべての交差を知ることでありました。こうしてはじめて一つの物ができあがるのでした。こうしてはじめて、それはいたるところの不確実の大陸から解き放された島になるのでした」（同p90）

愛をもって事物に傾倒し、一体化し、新たな事物を創造し続けたロダン。そこにあるのは「何事をも黙殺せず、何事をも看過せず、どこにおいても偽らなかつたこと」という事物それ自体への曇りなき観察と対象への愛をも超えた没我的作業であった。

確固とした、絶対的事物の創造。これは、この世界それ自体への愛の証であると同時に信仰で

ある。幼児が母を思うような絶対的信頼を持って、彼は事物の中に傾倒した。ここには「個性」はおろか、「思想」さえ存在しない。しかし、彼の作り出した作品はすべてが独自で、偉大な思想を帯びた神々しいものに見えてくる。ここに、我々は一人の人間の「我」を超えた、事物の中に眠る神の恩寵と「独自」を見ることができるのである。

セザンヌやトルストイを絶賛したのと同様、リルケの天才はロダンの中に同じ価値を見出したのであった。つまり芸術、及び芸術的生き方とは、小世界たる壁に囲まれた「我」の中にあるのではなく、目の前の「事物」や「現象」そのものの中に眠る法則を理解することにあるのだと。リルケはこうした寡黙な芸術家の中にこそ、未来の芸術のあり方を、つまりは未来の人間の理想の道を見出していたのである。

「「よく仕事できましたか。」これがロダンの、お気に入りの誰に向かっても挨拶がわりにする問です。なぜなら、もしこの問に「はい」と答えられたなら、それ以上もう問うことはないのですし、安心していいのです。仕事をしているものは幸福なのです。

信じられないほどの力の蓄えを自由に駆使するロダンの、単純な統一的な天性にとっては、こういう回答が可能なのでしたし、彼の天才にとっては、これは必然のことだったのです。ただこういうふうにしてだけ、彼は世界を征服することができたのです。人間のようにではなく、自然そのもののように働くこと、これが彼の定めだったのです」（同p101）

※参考文献『ロダン』リルケ著 高安国世訳（岩波文庫）

超人を抱きしめる神、神を救う悪魔

超人を抱きしめる神、神を救う悪魔 まど☆マジ論

「魔法少女まどか☆マジカ」について語るのには、簡単なことではない。まず何よりも、好きな人はそれぞれの「まどマジ観」があるだろうし、興味のない者はまったく興味がないアニメ作品であることが明白だからである。この境界線の原因になっているのが、「いかにも」な萌え系の絵柄とタイトルだ。「魔法少女」で萌え系の絵柄——その外面だけで、受け付けられない人はまったく受け付けられないに違いない。自分も後者であった。知人から勧められなければ、あえて見ようとはしなかったろう。

しかし、興味本位で観て、ぶっとんだ。これは奇跡の作品であった。それで、この作品の魅力と価値を何とか語ってみたいと思っていたのだが、一度観ただけでは感想がまとまらなかった。ので、何度か、繰り返し観た。

ちなみに、自分は劇場版の前編「はじまりの物語」と後編の「永遠の物語」、そして新編の映画作品「叛逆の物語」の3本の映画版しか観ていない。元々12話完結の深夜アニメであるが、アニメ版は「劇場版・前後編」で上手く編集されており、ほぼ内容がわかるということなので、未見である。ただし前後編は3回、新編は2回見た（ファンの中には数十回見ている人はざらのような）。というのも、この作品は時間のループが一つのテーマであり、すべてを見た後、もう一度最初から見ると、新たな発見と感動がある仕組みになっているからだ。

さて、「まどマジ」を知らない人向けに、ストーリーを簡単に説明しておこう。というよりも、ストーリーの紹介自体が、この作品の魅力と価値を伝えるものになると思えるのだ。ただし、今回の評論の主題である「神」と「超人」たる、主人公の鹿目（かなめ）まどかと暁美（あけみ）ほむらの関係だけにクローズアップさせていただく。上手くまとまるかわからないが、ウィキペディア等も参考にしつつ、やってみよう。以下、ネタバレ全開である。

魔法少女とはどんな願いでも一つ叶えることと引き換えに、キュウベエという異星人と契約を結び、人知れず魔女と戦う使命を課せられた存在である。ところが中学生の主人公、鹿目まどかは、優れた素質を持ちながらも傍観者として魔法少女の戦いに関わることになる。そう、主人公が魔法少女ではないのである。なぜなら、魔法少女としての契約を結ぼうとする度に、どういふわけか、謎めいた転校生の魔法少女、暁美ほむらが邪魔をするからだ。

最初、ほむらは、無愛想で時々わけのわからないことを言う「電波系」の転校生として、まどかと親友のさやかの前に現れる（ちなみに、彼女たちは中学2年生という設定である）。キュウベエといういかにもマスコットキャラ的な生き物を殺そうとして虐待し、まどかとさやかを魔女

から助けた一つ年上の魔法少女・巴マミとも敵対している。「何こいつ？」という扱いである。そして、執拗にまどかが魔法少女になるのを邪魔するが、まどかの才能への嫉妬や、ライバルが増えることを防ごうとしているだけだと思われる。

物語は、序盤（アニメでは3話目）で異様な姿を現す。魔女と戦っていた巴マミが、まどかとさやかの前で壮絶な死に方（魔女に首を食べられ、体を痙攣させて死ぬシーンがある）をするのである。ここで、萌え系でお約束のハッピーエンドな展開ばかりを予想していた視聴者は、度肝を抜かれ、一気に物語はヒートアップしていく。「萌え系」は一般に受け入れられるための仮面であり、実は、この作品のテーマは途方もなく重い、宗教的なものだったことが明らかにされていくのである。

平和のために人知れず戦うマミを尊敬していたまどかは、魔法少女になって彼女と一緒に戦うことを約束していたのが、マミの死を目の当たりにして、怖気づき、約束を破る。ほむらは「これでわかったわね」と魔法少女は甘いものでないことを再認識させる。彼女は、両手では数え切れないほど魔法少女の死を見てきたと語る。そして自分の弱さに涙するまどかに対し、「あなたを責める者は私が許さない」と奇妙なフォローをする。

まどかの親友さやかは、片思いの幼馴染の怪我（バイオリニストだが、腕を怪我して弾けなくなった）を治す祈りと引き換えに魔法少女になるが、魔法少女とは実は魂をソウルジェムという宝石に移らせることで、体をゾンビのように操る存在だと知り、「こんな体でどうやって抱きしめられたらいいの？」と嘆く。さらに、幼馴染は彼女の友達と付き合うことになり、夜な夜な誰にも知られることなく命がけで魔女を殺しながら、「私は何のために戦っているのだろうか？」という根本的な疑問を持つようになる。そして自分の存在に絶望した瞬間、祈りによって光り輝いていたソウルジェムが濁りだし、彼女は魔女に変身してしまう。

そう、魔法少女とは「祈りから生まれて絶望で終わる」最終的には魔女になる存在だったのである。彼女たちが倒していたのは、言わば、「未来の自分」であった。

魔女になる瞬間、さやかは、「誰かの幸せを願った分、他の誰かを呪わずにいられない」とつぶやく。

奇跡を願う祈りは、それが実現した時にこの世界の因果をゆがませ、必然的に呪いを生み出してしまう。これはキュウベエという異星人が仕組んだことで、何でも地球の思春期の少女の絶望という感情は、宇宙を死滅させるエントロピーの法則を凌駕するほどの力があり、そのエネルギーを搾取するために純粋な少女たちと契約を交わしていたというのである。

結局、魔女になったさやかはもう一人の魔法少女・杏子といっしょに死に、町に残った魔法少

女はほむら一人になってしまう。そんな中、最強・最悪の魔女「ワルプルギスの夜」がやって来る・・・

ここで、ストーリーは一旦ストップし、ほむらが転校してきた初日のシーンにループする。ところが、目つき鋭く、美しい黒髪をなびかせたクールな転校生はそこにはいない。ださい眼鏡をかけ、三つ綱のおどおどした体の弱いほむらなのである。心臓の病で入院していたため、勉強も追いつけず、体育もまともにできない。何一つ自信がなく、友達もおらず、誰の役にも立たない。一生このままなのかな、という暗澹たる気持ちで下校する中、「死んでしまった方が楽」という魔女の囁きに吸い込まれ、自殺しそうになる。そこに現れ、魔女を倒して彼女を救出したのが魔法少女となっていた鹿目まどかと巴マミである。とりわけ、自分のことを心配し、唯一友達になってくれたまどかの存在が、彼女を救うことになる。しかし、最終的には「ワルプルギスの夜」がやって来て、まどかもマミも敗れて死んでしまう。

ここでほむらは魔法少女になるため、キュウベエと契約を交わす。その願いとは、

「鹿目さんとの出会いをやり直したい！ 彼女に守られる私ではなく、彼女を守る私になりたい！」

である。この純粋な祈りによって魔法少女になったほむらは、時間を操る力（止めることと、遡ること）を手にし、鹿目まどかを守るために一人、時間を遡ることになる。SFものならありがちな設定とも言えるが、このアニメが恐ろしいのは、実は、ここからである。

目を覚ますと、再び転校初日。彼女は最初から魔法少女として登場し、まどかたちと一緒に戦うが、最後は、またしてもワルプルギスの夜に敗れてしまう。まどかを死と絶望という運命から救い出したい、と彼女は再び時間を遡る。出口を探してループを繰り返すうちに、キュウベエのたくらみを知ったほむらは、「私たちはキュウベエに騙されている」とみなに忠告する。しかし、自分たちがいずれ魔女になってしまうという真実を知った魔法少女たちは絶望し、お互いを殺し合ってしまう。

真実は、誰にも理解されないし、受け入れられることはなかったのだ。

もはや誰にも頼ることはできないと悟ったほむらは、一人、時間遡行者として、まどかが死ぬ度に時間を逆戻りし、孤独な戦いを繰り返すことになる。ワルプルギスの夜を倒し、「たった一人の友達」をバッドエンディングから救うために。時には、魔女になりかけた最愛のまどかを絶叫しながら撃ち殺すシーンさえあり、ここまでくるともはや「萌え系」どころの話ではない。

ほむらは幾度も幾度も失敗し、その度に一人、時間を転校初日に遡る（途中から眼鏡を外し、

三つ綱をほだき、その目つきはどんどん鋭くなり、アニメ登場時の姿になる)。しかし、たった一人の友達と濃厚な時間(最後は、愛する者の死を目撃するのだ)を繰り返せば繰り返すほど、相手への思いは強くなる一方、現実のまどかとはかけ離れた、常人からは理解され難い、異質な存在になっていく。しかも、まどかを助けるための時間遡行の繰り返しが、まどかの因果を深め、彼女を最強の魔法少女にして世界を滅ぼす最悪の魔女にしてしまっていることが判明する。

ここで、ようやく物語の最初の時間軸にたどり着く。そして、彼女がなぜあんなにも冷淡なのか、なぜまどかが魔法少女になることを邪魔していたのかが明らかになる。彼女は、まどかを魔法少女にすることなく(つまり、魔女にさせることなく)、一人で戦う決意をしていたのである。ほむらは、何度も平行時間を戦う中で体力も知識も増え、強くなっていた(彼女の戦い方は、時間を止める他は、銃やロケットで攻撃するという現実的なものである)。そして一人、ワルプルギスの夜を倒そうと果敢に立ち向かうが、またもや敗れてしまう。

もはや、魔女を止める魔法少女はこの町にいない。魔女は自然災害の形を取って、まどかたち家族がいる避難所も破壊しようとする。血まみれになったほむらは、再び、時間を遡行しようとするも、その行為がまどかを結果的に強力にし、友達も世界も滅ぼしてしまうという真実を思い出し、どうすることもできなくなって、ついに絶望する。そしてソウルジェムが濁り出し、ほむらが魔女になりかけた最後の瞬間、まどかが目の前に姿を現すのである。

「もういいんだよ」とまどかはほむらの手を握りしめて、ささやく。

「私、魔法少女になる」

その願いとは、

「すべての魔女を生まれる前に消し去りたい。すべての宇宙、過去と未来のすべての魔女をこの手で」

「そんな祈りが叶うとしたら因果律そのものに対する叛逆だ。君は本当に神になるつもりなのか」と驚くキュウベエに対し、まどかははっきりと言う。

「今日まで戦ってきたみんなを、希望を信じた魔法少女を私は泣かせたくない。最後まで笑顔でいて欲しい。それを邪魔するルールなんて壊してみせる、変えてみせる！」

こうして、まどかは魔法少女になってワルプルギスの夜を滅ぼし、すべての歴史上の魔法少女たちを救うと、神になってこの世から消える。上位概念と化した彼女は、この世界に最初から存在しなかったことになった。ほむらの記憶の中にだけ、その痕跡を残して。

そう、どこからどう見ても暁美ほむらの物語だったこの「魔法少女まどか☆マギカ」は、最終話でついに鹿目まどかが主役になったのである。自らを犠牲にして、すべての魔法少女を救うことで。

誰にも理解されることなく、一人の友人を守るために孤独に戦い続ける少女・暁美ほむらの姿は、神も悪魔も信じることなく、自らの力を信じて永劫回帰する孤高の超人にも比すことができるだろう。彼女は、一人、愛する者のために、誰にも理解されない運命を受け入れ、孤独な戦いを延々と繰り返す。彼女の祈りと苦しみ、絶望的な戦いを知る者は、この世界に誰一人としていない。しかし、唯一それを見守っている存在がある。それは神になって時間を超越し、すべてを知った鹿目まどかである。まどかは消える瞬間、ほむらを抱きしめてささやく。

「今の私にはね、過去と未来がすべてが見えるの。（中略）だからね、全部わかったよ。いくつもの時間でほむらちゃんが私のためにがんばってくれたこと、何もかも……。何度も泣いて、傷だらけになりながら、それでも私のために……ずっと気づけなくてごめん……ごめんね。今の私になったから、本当のあなたを知ることができた。私にはこんなにも大切な友達がいてくれたんだって、だから嬉しいよ。ほむらちゃん、ありがとう！ あなたは私の最高の友達だったんだね」（ここは、誰もが泣くシーンである）

こうして、超人は神によって見守られ、理解され、愛されることで救われた。

魔女のいなくなった世界でも、もちろん、ゆがみはあり、闇はある。それは魔獣という存在として現れる。まどかが守ろうとした世界で、ほむらは戦い続ける。

さて、こんな風に宗教・神話・哲学的背景を踏まえつつ、それらを見事に現代風に結実させ、完璧ともいえるエンディングで終わった異様な深夜アニメが「萌え系」の境界を越えて一気に話題になり、賞賛を受け、様々な賞を受賞したのもうなずける（自分はリアルタイムで知らなかったが。震災の時期に一旦中断したアニメということもある）。私はこのテレビ版を編集した劇場版「はじまりの物語」と「永遠の物語」ですっかり満足していたし、「ガンダム以来のテレビアニメの傑作だな、これは」と思っていた。

ところが新編の映画「叛逆の物語」では、なんとほむらは悪魔になってしまうのである。この稿では多くを語らないが、最初のほむらの願いが「彼女（まどか）に守られる私ではなく、彼女を守る私になりたい」であったことを思い出す必要がある。結局、ほむらは、まどかの犠牲によって成り立った新しい世界を認めることができなかつたのだ。なぜなら、そこには、彼女が戦い続ける理由である、愛すべきまどかがいないのだから。そもそも「まどかを守る私になりたい」が願いだったのだから、当然と言えば当然である。結局、彼女は神に叛逆し、まどかという単体

を地上に引き落とし、新たな世界を作らんとする。

この悪魔化は、まどマギファンの中でも賛否両論で、映画観で観た私も、最初は「観念的すぎるしよくわからない」と思っていた。暁美ほむら＝暁の明星＝ルシファー。確かに、彼女は墮天使の刻印をされていたのだが、アニメ版のストーリーの完成度に対し、観終わった時は、これではどこに救いがあるのかと思ったほどである。しかし、繰り返して観て気づいたのは、彼女の愛は、偏執的でエゴイスティックなものに見えて、実は、自らが悪魔になってでも一人の人間を救うという自己犠牲的なものであり、いわば悪魔による神の救済なのである。

こうして、物語は神による世界の救済から、次のステージに移る。世界は、悪魔に支配されたのだ。しかし、その悪魔の存在の根底にあるものは、神となってしまった一人の人間への愛なのである。ここまで来ると、既存の愛の形、宗教的な聖なるイメージは通用しない。伝統・固定観念を打ち壊し、新しい地平に現れた神性の顕現として、超人かつ悪魔である暁美ほむらの姿に新しさを認める他ないのである。

真実は、未知なるものの中に、まったく類例のない形で現れる。

愛は、愛という言葉で表すことはできない。

神は、これまでの偶像で表現することはできない。

無我は、無欲ではなく、時に強欲という形で表現される。

聖なるものは、時に、奇異なる形で現れる。

神は、その無限界という性質故に、常に時代に即した、新たな形で表現されることを求め続ける。

そう、神は、常に既知ではなく、未知なるものの中にこそ顕現するのである。

エゴと無数の観念、常識によって見えなくなった、我々の背後に眠る巨大なる神性——それを新たな形式でもってこの地上に掘り起こし、表現するのが、芸術の役割ではないだろうか。しかし残念ながら、そうして掘り起こされ、大胆に彫刻された作品は、常識や伝統に縛られた同時代の人々の目には不気味なものとして映り、時に否定され、忌避される。

だが、様々な種類の才能が集うと、時に、奇跡が起こることがある。宗教的伝統を踏襲し、伝統を打ち壊し、極めて現代的な形で、万人に通じる新たな愛の形を生み出した「魔法少女まどか

☆マギカ」は、「叛逆の物語」において、ついに真正の芸術作品となったのである。

P s : おそらく、続編が作られるものと思われるが、悪魔化したほむらを救うために、まどかがどのような行為に出るのか。我々の想像を超えた、新たな愛の形に注目したい。

宗教的精神におけるアヴァンギャルドのあり方とは

宗教的精神におけるアヴァンギャルドのあり方とは

岡本太郎の不朽の名著『今日の芸術』で、最も有名なフレーズは以下のようなものだろうか。

今日の芸術は、

うまくあってはならない。

きれいであってはならない。

心地よくあってはならない。

岡本太郎はこれを芸術の根本原則とした。つまり、「きれい」「心地いい」といった既存の価値観に追従し、保守する傾向を彼は徹底的に嫌っていた。そしてこう断言する。

「見るものを圧倒し去り、世界観を根底からくつがえしてしまい、以後、そのひとの生活自体を変えてしまうというほどの力をもったもの——私はこれこそ、本当の芸術だと思うのです」（『今日の芸術』99p）

芸術とは、既存の価値を乗り越え、新しいフォルム、形式の内に新しい普遍的価値を提示するものであり、伝統の超越である。こうした価値観は現代のモダンアートと言われる作品群において、もはや何が伝統で、何が正統で、何がアヴァンギャルドかわからないような混迷を生み出すことにもなったわけだが、岡本太郎の言葉が、芸術を「美しい」「きれい」「心地いい」ものと思いついてきた一般大衆や若いクリエイターを解き放つきっかけになったことは間違いない。例えば、こんな力強い宣言が、いかに若き、認められない芸術家の卵を力づけてきたことか。

「芸術は、絶対に新しくなければなりません。芸術はいつ、いかなる時代でも、新しいという意味で、大きなあこがれでもありました。と同時に、それがために、まえに述べたように、きわめて残酷に非難されてもきたのです。芸術家は、それぞれの時代の評価、矛盾に耐え、勇気と英知をもって、それをのり越えてきたのです。

芸術は創造です。だから新しいということは、芸術における至上命令であり、絶対条件です。じっさいに芸術史、美術史がそれを明らかに証明しています。ためしに、美術史のページを開いてごらんください。まちがいなく言えることは、芸術はけっして、同じ形式をくりかえしていないということです。美術の伝統は厳然とつらぬかれています。同じような形式、内容が二度出て

くるということは絶対にないのです。（中略）」（同59p）

「芸術は、つねに新しく創造されなければならない。けっして模倣であってはならないことは言うまでもありません。他人のつくったものはもちろん、自分自身がすでにつくりあげたものを、ふたたびくりかえすということさえも芸術の本質ではないのです。このように、独自に先端的な課題をつくりあげ前身していく芸術家はアヴァンギャルド（前衛）です。これにたいして、それを上手にこなして、より容易な型とし、一般によろこばれるのはモダニズム（近代主義）です」（同91p）

さて、こうした言葉に触れて思ったことは、「常に新しくなくてはならない」という芸術の根本原則は、芸術のみならず、宗教的精神の表現（いわば無我表現）のようなものにも通じるのではないか、ということである。

我々が求め、探求するところの「無我表現」とはいわゆる、宗教的、道徳的でも固定的イメージをもった「無我」のことではなく、時代に即した、新しい、全体的表現の奔出のようなものである。それは時に、既存の宗教的イメージを乗り越え、まったく新しい形式の中に顕現する。時に、保守的な人々が眉をしかめるような、俗なものの中にこそ神性が宿るのである。我々は、その新しき神の形をこそ発見し、評価するべきだと考えるのだ。汚泥の中にハスの花を見出すように。

「新しさ」と共にある時に人は感動し、精神を浄化し、あるいは舞い上がらせて、常に新しいものを受け入れて生きる一人の人間として輝くことができる。岡本太郎は、心地の良いモダニズムの価値を認めつつも、生活におけるアヴァンギャルドの必要性を繰り返し、繰り返し、真っ直ぐに説いた。

「モダニズムには、時代を創造していくエネルギーはないかもしれませんが。しかし、モダニズムには、また、その価値と役割があります。真の芸術家が創造したものを模倣し、型として受け入れ、通俗化してその時代の雰囲気をつくっていくという、流行としてのモダニズムがあります。その力によってもやはり、時代というものが動かされていくのです」（同94p）

「モダニズムは、あくまでこちよく、生活を楽しくさせるものであるかもしれないけれども、ふるいたたせて、生活からあたらしい面をうちだす、猛烈な意志の力をよびおこすものではありません。

そういう一般的なイージーな気分に対して闘おう、それに対して、なにかあたらしいものをつかみとって、次の時代に飛躍していこうという少数者は、時代にただちに受け入れられない。認められず、孤独でも、絵にならない絵、つまり芸術というものをおしすすめていかなければなら

ないのです。芸術のアヴァンギャルドの運命です。そういう人たちこそ創造者、芸術家の名に値するのです。しかし、少数者といっても、わたしは芸術家じゃないから、少数者にはいらないと考えてはなりません。どんな人間の精神のなかにも、やはりこの二つのものが、あるものです。

（中略）いわば、人間のはげしい生命力のようなものが、ほんとうのアヴァンギャルド、芸術家の創造に対して、やはりピンとひびいてくるのです」（同93p）

私がこうした言葉から連想したことは、ゴッホやセザンヌのような孤独で、生前にまったく理解されなかった芸術家たちはもちろん、ゴードマ・シッタールタや、イエス・キリストのような宗教的存在についてである。真の芸術家同様、真の宗教的精神の持ち主は、いずれもアヴァンギャルドであり、革命家であり、時代のマジョリティから排斥されてきたことは言うまでもない。真の宗教者は芸術家であり、時代に即した新たな価値の創造者であるからである。彼らの革命精神を受け継ぎ、守る者たちが彼らを教祖に祭り上げ、宗教を作り、伝統の上にあぐらをかき、保守化したのだ。それは社会を安定させるモダニズムとして有効な働きを示したことは間違いないが、反面、権力と結びついて暴力を正当化し、人間の精神を凡庸化することになった事実を見逃すことはできない。

しかし、宗教的精神は、芸術の世界よりもはるかにアヴァンギャルドであることが難しいのである。なぜなら、伝統と一体化した人々にとって、彼らは異端であり、時に悪魔的な存在そのものとして否定・抹殺されるからである（世界のニュースを見れば現代でも異端審問や魔女狩りが行われているのはわかるだろう）。

宗教におけるアヴァンギャルドにはもう一つ危険がある。つまり、真の芸術のように自らの血肉によって独自に生み出されたものではなく、安易な宗教的思想のごった煮、折衷主義によって生まれた新興宗教やカルトが引き起こす様々な問題である。そうした事実を踏まえた時、岡本太郎の言葉は、何と厳しい響きをもって、我々のあり方を問い詰めてくることだろうか。その厳しさは、時代を創造しよう試みる少数の者だけでなく、それを受け止める人々の側にも求められているのである。

「すぐれた芸術家は、はげしい意志と決意をもって、既成の常識を否定し、時代を新しく創造していきます。それは、芸術家がいままでの自分自身をも切りすて、のり越えて、おそろしい未知の世界に、おのれを賭けていった成果なのです。そういう作品を鑑賞するばあいは、こちらも作者と同じように、とどまっていなくて駆け出さなければなりません。だが、芸術家のほうは、すでにずっとさきに行ってしまうわけです。追っかけていかなければならない。どうして、こういうものを描いたんだろう——どうして、こうなったんだろうということを、心と頭、全身で真剣に考え、その距離をうずめていかなければならないのです。

創作者とほとんど同じ緊張感、覚悟をもって、逆にこちらも、向こうをのり越えていまという

気持ちでぶつからないかぎり、ほんとうの芸術は理解できないものです。つまり、見るほうでも創造する心組みでぶつかっていくのです」（同101p）

「だから、創られた作品にふれて、自分自身の精神に無限のひろがり豊かないろどりをもたせることは、りっぱな創造です。

つまり、自分自身の、人間形成、精神の確立です。自分自身をつくっているのです。すぐれた作品に身も魂もぶつけて、ほんとうに感動したならば、その瞬間から、あなたの見る世界は、色、形を変える。生活が生きがいとなり、今まで見ることのなかった、今まで知ることもなかった姿を発見するでしょう。そこですでに、あなたは、自身を創造しているのです」（同117p）

様々な価値観が錯綜し、解く術を失ったかに見える現代、私たちはこの混乱する世界全体を踏まえた新たな創造という難題にゆきづまり、途方に暮れることがあるかもしれない。実際、すべての宗教、価値観を踏まえた新たな神話はまだどこにも生まれていない。しかし、自ら時代を切り開こうと、孤独な創造者であり続けた芸術家の言葉は、私たちを再び立ち上がらせる力を持っている。それは虚無と向き合った一人の誠実な人間の言葉であり、暗闇から逃げなかった勇者の言葉でもある。

「まことに芸術はいつでもゆきづまっている。ゆきづまっているからこそ、ひらける。そして逆に、ひらけたと思うときにまたゆきづまっているのです。そういう危機に芸術の表現がある。

人生だって同じです。まともに生きることを考えたら、いつでもお先まっくらいつでもなにかにぶつかり、絶望しもそしてそれをのりこえる。そういう意志のあるものだけに、人生が価値をもってくるのです。つまり、むずかしい言い方をすれば、人生も芸術も、つねに無と対決しているのです。だからこそおそろしい」（同97p）

私たちは与えられた心地よさに安住するのではなく、自らの幸福だけを考えるのではなく、常に時代を逞しく創造していかなければならない。なぜなら、新しさの中にこそ愛があり、創造があり、神性が宿るからである。諸行無常の世界において、変化の中に一種の輝きを生み出すこと——その中に、私たちの新たな関係、平和の可能性というものがあるのではないだろうか。私たちは、いつまでも迷い、うつむき、立ち止まっていたはならないのだ。

最後に、すべてのアヴァンギャルドな精神の持ち主たちに、岡本太郎の真っ直ぐなエールの言葉を贈り、この稿を締めくくりたい。

「過去のできあいのイメージにおぶさるのではなく、豊かな精神で自分たちの新しい神話・伝説をつくるのが芸術であり、また生活なのです。できあいのものなら、やすやすと認めようとする

、奴隸的な根性からぬけだして、新しい神話をたくましく創造していくべきです」（同43p）

参考文献：「今日の芸術」岡本太郎著（光文社）1954年

すべては落ちて、隆起する

著者：那智タケシ

著者プロフィール：

1971年生まれ。フリーライター。早稲田大学第二文学部西洋文化専修卒。

無我表現研究会主宰。著書に『悟り系で行こう』（明窓出版）、『二十一世紀の諸法無我——断片と統合——新しき超人たちへの福音』（ナチュラルスピリット）がある。編集協力としては『人は必ず老いる、その時誰がケアするのか』本田徹著（角川学芸出版）他多数。

無我表現研究会HP：<http://www.mugaken.jp/>

著者ブログ：<http://nachitakeshi.hatenablog.com/>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ